

340
36

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5

始



三叉文存

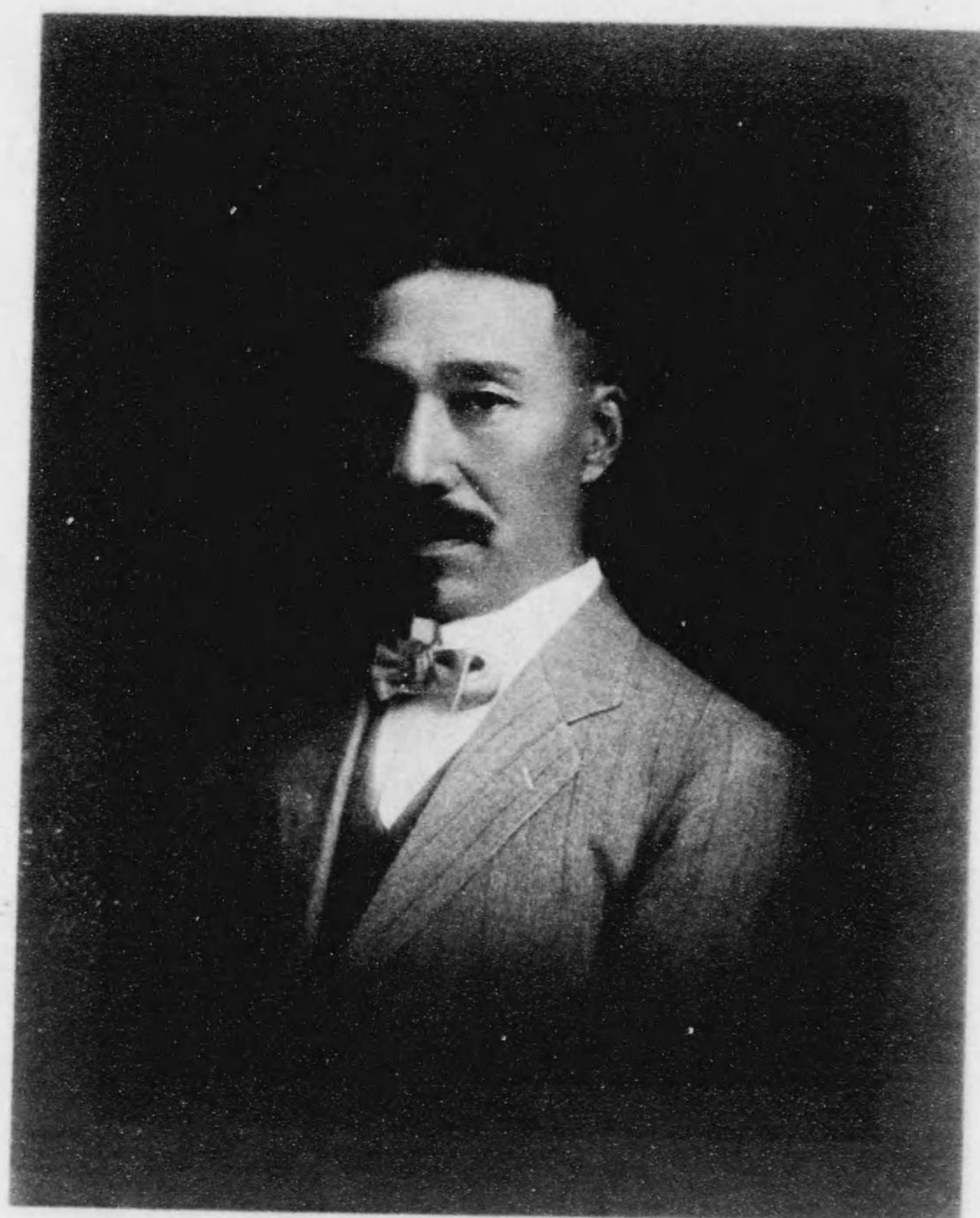


340-36



又
又
存

大正
3. 10. 7
内交



功名富貴兩亡年
且盡生前酒一觴
多種双花三百本
短籬風雨四時
香

三又生

三又文存目次

書齋雜信

風光また一年を更ふ……………	一
燒栗爐中の野趣……………	三
此翁巨大の投機師……………	四
汽車の走るを推すと云ふの愚論……………	五
列國のものを加へば更に妙……………	六
スフキソックスの算盤……………	七
好辭柄無之に苦しむ……………	八
秋光渲染……………	九
純羊に非すと斷せんや……………	一〇

國民と議會と功罪を分つべし……………一
 汝の長城を壞つもの……………二
 餘りに狭量ならずや……………二
 蔚然たる詞林となれり……………三
 今一息の所……………四
 趣味多きを覺ゆ……………五
 天公は公平に候……………六
 春秋の筆法を用ふれば……………六
 御詠を紳に書せよ……………七
 猶腫物の如し……………八
 私語と風説とに遣らる……………九
 欺かるゝを免れず……………九

能く親の心を知らん……………一〇
 ○ また良友たらん……………二
 攻守共に一段の工夫を要す……………三
 今は四十四年に候……………四
 朝鮮料理なども亦一興……………七
 第一人に御坐候……………一〇
 英雄の末路憐む可し……………一
 屑々婦女の事のみ……………三
 今少しく史實あらば……………三
 治人あつて治法なし……………四
 現代は知らざる可らず……………五
 練り合せの丸薬ならんのみ……………六

次 目

友人なるが故に切望致候……………三七

之は是非もなし……………三七

花神に背く二十年……………三六

官職と人物との混同のみ……………四一

英雄には無御坐候……………四二

今猶古の如し……………四三

餘裕が無頓著か……………四三

活力の徒費に堪へず……………四四

氣力の組織訓練陶冶に在り……………四四

葉公真龍に駭くの類……………四九

鐘聲濕りて雨至る……………五〇

應接策を聞かん……………五一

次 目

報酬を求めざる愛情……………五二

是れ名卿巨公の座右の銘か……………五三

廟堂湖海志を易ふるは如何……………五五

舉動曖昧にして浮説生ず……………五六

旅行は人生最大の快事……………六二

始皇の坑儒よりも甚し……………六三

是が即ち外交にて候……………六六

明月重ねて來るの感あり……………六九

水を斬れば水更に流る……………七一

ゼームス・ムルドック氏の日本史……………七四

植人は百年の謀……………七七

雲泥の差を見る可し……………七九

無黨と有黨との辯……………七九

憐む可しスノッブの本色……………八〇

羽左衛門無く梅幸無し……………八〇

小松原氏滑稽突梯の傑作……………八三

顧みて他を言はしむるが爲ならん哉……………八六

トロアの森林生活……………八九

湯ヶ原にて……………九二

秦を亡ぼす者は楚ならん……………九五

以呂波にては間に合ひ兼ね候……………九八

託して太平洋の海波にあり……………一〇〇

追罰をも加へざる可らず……………一〇一

骨董賞翫其弊二あり……………一〇三

是れ新聞のみ、出来事にあらず……………一〇六

目的は交権にあり……………一〇九

長安奕碁の如し……………一一一

田園生活に在る人に送る……………一二三

風流壇上の一罪……………一二五

講演會の料金徴收は興學の端……………一二八

破格の恩典は聖代卓越の所以……………一三〇

一向に容赦の要らぬ事也……………一三三

行藏地を易へなば吾猶人の如し……………一三四

ストライキの横流此に至りて極まれり……………一二七

興味ある日土修交條約……………一二九

人類のゴールは故郷に在り……………一三三

二個の異様なる伯林電報……………一三五
 悉く是れ史眼なき歴史家也……………一三八
 曾遊の陳迹を想起致し候……………一四〇
 當今の學生意氣振はざるに非ず……………一四二
 國家の信用を代價とするを許さず……………一四五
 朝吹英二氏の石田三成論……………一四七

時鳥候蟲錄……………

膠州灣占領問題……………一五一
 新戰國策……………一六六
 羅馬盛衰記に題す……………一八四
 新聞記者論……………一八八

新宦官を論ず……………一九四
 近時の政變及び其前途……………二〇一
 一 進歩黨は何故に敗れし乎……………二〇一
 二 薩摩内閣の役者及び其の運命……………二一九
 現代婦人の叫は性関打破に在り……………二二三
 虚榮心は世界的の慾望……………二二九
 一 文明の出發點……………二二九
 二 人間の情と生活慾……………二四一
 三 英雄も亦小兒である……………二四二
 四 妻の指環……………二四三
 五 歐米人の寶石嗜好……………二四四
 六 勤儉よりは勤奢がよい……………二四五

○ 籠城的教育と野戰的教育……………二四七

一 耳を掩うて鈴を盗む……………二四八

二 湧いて起つて大變動……………二四九

三 世間を知らざる罪……………二五二

四 今は野戰の時代なり……………二五三

五 政治に對する興味……………二五五

六 新しき酒と舊き革囊……………二五七

米國近狀……………二五八

紅顏の美少年國事に奔走す……………二七六

一 上海より南京まで……………二七六

二 江南の煙雨……………二八〇

三 莫愁湖畔に立つ……………二八一

四 斷髮即文明の奇觀……………二八三

五 吁紅顏の美少年……………二八四

六 悲劇又喜劇……………二八六

第三級時代の政治文學……………二八八

一 我輩にして且つ然り……………二八九

二 然りと雖も第三級に適應せしめよ……………二九〇

三 既に第三級の覺醒期に入れり……………二九二

四 バーンヌの出でし如くならざる可らず……………二九二

五 未だ第二級の運動たるを免れず……………二九五

總理大臣……………二九六

首相をして樞相を兼ねしめよ……………三二五

政黨政治家も亦官僚のみ……………三三一

何の爲の二師團……………三六

○ 植民文學及び植民教育……………三五九

二十年間の堯風舜雨……………三六二

海軍政策一變の機熟す……………四〇一

一 征服の愉快……………四〇一

二 海軍政策一變の機……………四〇二

三 祕密の下に腐敗あり……………四〇五

四 生れながら白髮の薩摩……………四〇八

五 超、超、ドレッドノート現出……………四一三

六 艦型の變遷に一定の法則あり……………四一五

七 巨艦不利の實驗……………四一九

八 我國家は形勢に順應すべし……………四二二

三叉文存目次 終

九 凡ての事失敗のみ……………四二五

十 世界の魁を爲せよ……………四二九

三又文存

竹越三又著

書齋雜信

風光また一年を更ふ

新年の御慶、萬里同風、芽出度申納候。元旦に祝辭を述ぶるはコンヴェンショナルの様に候へ共、是又、人心一新の妙用にて、古聖先賢、之を以て人事に段落を附して、舊を忘れ新を思はしむるの功、没すべからず候。若し天下の人悉く悟道して、「前月大。後月小。昨日晴。今日雨。君欲問三百年。百年如く此過」などと申候はんには、三四豪英の士を除きては、自奮勉

強の道も立たざるべく候へば、歳末元旦などの段落は、人文興新の一大要素と可申候。

花に枯榮ありて春秋を畫し、日に陰陽ありて、晝夜を分ち、人には元旦歳暮ありて、新舊を別つ。見來れば年と共に新なるは、上帝宇宙構造の一經綸ならんか。願はくは年と共に新にして、舊を忘れ、悔恨を忘れ、失望を忘れ、洋々たる春海の如き希望を抱き度きものに御坐候。歲月流るゝが如しと申せば、如何にも老を催すが如くに候へども、『風送ニ落紅ニ攪馬過。春光更比ニ路人ニ忙』と申せば、多忙活潑なる天翁の模様も見え候。願はくは此の活潑なる天翁の事業を學びて、有爲に、果敢に、積極に、働き度きものに御坐候。

當局の政治や、得意の權豪に就きて彼是と論ずれば、云ひたき事は山々に候へ共、時代と申せば、實に恬熙と申すべきものにて、古來、昭代の太

平などと申せば、多くは詩人名士、諂諛の詞に候へ共、今日は眞に昭代と申すべき時に御坐候。また古來、大皇帝の現出を頌して、華夷を混一すなどと申し候へ共、我國にはかゝる時代もなく、唯だ國內の同志打に過ぎざりしが、今日こそ、北は樺太のギリヤック人種より、南は臺灣のマレー人種に至るまでも、我制令を奉ずると云ふ有様にて、眞に華夷を混一すと云ふ時代と相成り候。我等生れて此雄大なる昭代に會ひ、風光また一年を更ふ、宜しく時鳥候蟲と共に、太平を鳴らすべきのみ。(明治四十四年一月一日)

燒栗爐中の野趣

正月の三箇日は、天公また意ありて爲すにや、毎年、日本晴なるこそ芽出度けれ、一昨及び昨日は、小生、眞の閒人となりて、書齋に籠城致候。讀書窓下に殘燈ありと申すほどの古風なきも、燒栗爐中に宿火ある位の野

趣は有し、寒門の難有さには、車馬を驅りて利益を禱る熱客も參らず、十分心おきなく新書、舊冊を翻讀するを得、近頃快心の至に存候。古人の詩に『唯有春風不三世情。寒門要路一時生』と申候。春風のみは世情の如く薄からず、得意の人々も、失意の人々も、公平に行き渡るこそ嬉しく存候。

(明治四十四年一月三日)

此翁巨大の投機師

中央公論は由來、其蒐集する論文を以て名あり。新年號もまた甚だ悪からず。唯大隈伯論に至りては、多くは遠慮にあらずんば諛辭にて、感服仕り兼候。此翁巨大なる投機師にて、時勢の風雲に乗ずるの才、盡くる所なしと雖も、險誕にして、恃むべからず、敵を敵とせざるの識度あるなし。是れ夫れ其遂に敗れたる所以に候。若し夫れその近頃の言論に至りては朝

可、夕難、シドロ、モドロにて、眞面目に聴くに堪へず。小生は猶ほ一層の利刀を以て、此翁を解剖する人あらんことを祈り候。若しそれ社論に至りては、議論、堂々として大家の風を具へ、其筆勢、芋綿曲折、當世稀に見る處、筆者、松井君、今やまと新聞にあり。小生は此才筆を以て國民新聞を飾りたらばと思ふこと、數々に御坐候。(同日)

汽車の走るを推すと云ふの愚論

太陽は正月號に至りて、殆どその内容を一變したるが如くに候。集め得たる論文、多く記述的にして、論辯的ならざるもの難有く、諸家の説、皆有益にして興味あり、且つ多方面に亙りたるは、編者、苦心の點なるべしと存候。建部遜吾氏の官僚政治論、頗る面白く一讀致し候。但し官僚政治とはピロクラシーの翻譯にて之を攻撃するものは、官僚を攻撃するには

あらず、官僚の権利、利益を主順とし、若くは目安とする、若くは官僚を唯一の選挙区として大臣を作らんとする政治を申すことにて、刀筆政治と譯せしならば御同意の事と存候。此點は筆者已に解するが如し。何の世にか政府なからん。何の政府にか組織したる官房なからん。何れの論者か、官房政治を否定せん。小生は建部氏が、事々しく官僚政治の效用を説くを怪しむのみ。昔人、後より汽車の走るを推して、我力能く之を進めたりと申すものあり、建部氏の論殆ど此種に屬し候。(同日)

列國のものを加へば更に妙

『富の日本』は新年號に入りて、愈々其精彩を發揮致し、此種の雜誌中の白眉と申すべきものと相成り候。幕府大奥の正月、最も讀むべし。『海外の日本』は植民政策を講究せんが爲に企てられしもの、如く、其内容の豊富

なる、殆ど容易に卒讀致し兼候。若し列國の植民制度などを加へんには、愈々妙と存じ候。(同日)

スフキソクスの算盤

肅啓 爲まじきものは宮仕とは塚田理財局長の謂なるべし、我鐵道の幹線を廣軌とし、河川を改修し、朝鮮鐵道を延長せんとせば四億内外の巨資を要し、而して政府が所有する普通預金や特別預金や借入金にては今年だけの財用に充つるを得べきも、明年以後公債に頼るの外なきは、三尺の小兒も、能く曉解する所、塚田氏此普通の事實を語りて其官職を奪るゝに至りてはまた憐むべし。蓋し大藏省には一個巨大の算盤あり。彈き方によりて、時として二二が四となり、時として二二が七ともなり、官職の通人、目してスフキソクスの算盤と云ふ。唯だ能く之を彈くものにして始めて仕

官と爲るを得べく候。塚田氏、年少率直、或は未だ此算術を解せざりしものか。去るにても此一免官、政府部内の動搖を洩露して餘ありと申すべく候。(明治四十三年十一月十五日)

好辭柄無之に苦しむ

鐵道改築も可し、海軍擴張も之なかるべからず。治水もまた不急ならず。但し此等の事業は一年限りの事業にはあらず。政府此等の事業を開始せんには須らく、今後の財源を明示し、内外に安心を與へざるべからず。然るに今年のみは預金部の融通にて事足るべしとなし、また前途の經綸を示さず、耳を掩うて鈴を盗み、強て非募債の空言を弄せんとするは、如何にも國家百年の大業を擔當する政治家の所業とも思はれず候。口惡の京童は、是ぞ後は野となれ山となれの桂式にて此一事以て政府が永く其地位を

保つの心なきを卜すべしと申し居り候へ共、小生は政府を辯護すべき好辭柄を有せざるに苦み候。廣軌鐵道甚だ不可ならず。小生の宿論も如斯に御坐候。但東海道線すら、未だ單線の不便を忍びつゝある所あり。廣軌に先ちて之を復線とするを急務と存じ候。今年の水害にて破損したる復舊工事も本式にすれば、一千萬圓を要するものを、應急修築に止めたる所あり。廣軌に先ちて此修築を完全ならしむるの要ありと存候。鐵道と港灣の連絡は、年來の宿題なれども、是すらも未だ解決せられず、廣軌に先ちて此問題を解決するを急務と存候。(同日)

秋光渲染

積雨始めて霽れて青天高く澄み、菊舒び、籬黃に、楓冷にして山紫に、秋光渲染、別に文章を具ふ。此頃の風光上帝中年の傑作と申すべき

か。唯だ薔薇花のみは、多雨のため、芽弱く、花少く、香芬薄きは頗る憾むべし。近時、東京の縉紳淑女、薔薇を手栽する者少からず。小生は期年の後、薔薇花共進會の開かるべきを希圖致候。(同日)

純羊に非ずと斷ぜんや

近頃議會に對する批評を見聞するに、言語道斷の説少からず。或は一切の議員を、詰らぬ者の如くに論じ、或は一切の議員を、如何はしき者の如くに評するもの有之候。成程詰らぬ者や、如何はしき者も可有候へ共、三四黒色の羊子ありたりとて、全群を純羊にあらずと斷するは、大早計には無之や。愚見によれば我議員は年と共に、其才熟し、其人物磨かるゝもの少からず、小生は議會にあること已に九年にして、益々畏敬すべき人多きを感じ候。然るを一切に非難し去るは、速了の見には無之候哉。

(明治四十三年十二月二十五日)

國民と議會と功罪を分つべし

世人或は我議會を以て、外國のそれに比し、及ばざる遠しと思ふもの有之候へ共、必しも然らず。我議員の或る者は、之を英佛の議會に立しむるも、恥しからぬ者少からず候へば、世人が思ふが如く、雲泥の差あるものには無御坐候。唯だ彼にありては、議會の議決は即ち内閣の更迭となり候へ共、我國に於ては然らざるが故に、議會の勢力を發揮し得ず、従つて議員功名の途、杜塞せらるゝが爲め、自奮自強するもの少なき傾向有之候は掩ふべからざる事に有之候へ共、是は國民が、議會と功罪を分たねばならぬ事と存じ候。(同日)

汝の長城を壊つもの

昔し五代の擅道齋は、善戰善謀、能く國人の生命を保安したるに係らず其一二の過失は國人の疑惑を惹き、國人の疑惑は敵國の反間を招き、遂に自から汝の長城を壊つと、國人を罵つて死に就き候。而して擅道齋死するや、敵國、恐るゝに足るものなしとなし、流に順つて殺到し、遂に宋を亡ぼし候。我議員過失多かるべし、我議會無力なるべし。然ども國民の權利を擁保する唯一の城郭に候、之を批評するに方りて心せずば、恐らくは國人、自から汝の長城を壊つての悔あらん。小生は議會を冷評惡罵する人々が、暗中、紅舌を吐きて、笑ふ人あるを忘却せざらんことを希ひ候。(同日)

餘りに狹量ならずや

小生はまた議員中の失意家が、其得意の人を攻撃するに方りても、少しく言語を謹まんことを冀ふ。辯論は人の自由とは申しながら、我一人、清高にして、全院悉く俗物なるかの如き口調に接しては、如何に寛宏の人と雖も顰眉せざるを得ず、天下は廣し、他人に泥をかけずんば己の清高を維持し得ずとは、餘りに狹量には無之や。小生は盛名を得んと欲する人々が、議會と共に名を爲すの策に出でんことを希望して已む能はず候。(同日)

蔚然たる詞林となれり

三田文學は發刊以來日猶は淺きに係らず、已に蔚然たる詞林となりて、見るべきもの少なしとせず。新年號特に然りとす。中に就きて永井荷風氏の白樂天の一篇、面白く讀誦致候。之にて樂天の琵琶行も、新しき色彩と新しき空氣とを帯びて蘇生致候譯にて、才人の才筆羨むべきを覺ゆ。何と

かして是を劇場に上せて歌はしめたと存候。但し慾を申せば、淪落したる麗人の述懐は第三人として物を申す様の趣なきにあらず、願はくは今一しほ、第一人として、自家の胸臆を述ぶる様にしたらばと思はれ候。

(明治四十四年一月四日)

今一息の所

東洋時論は多くの政治雑誌中最も主張あるもの、一に候。其編輯の體裁材料の撰擇、今一息と思はるゝ節なきに無之候へ共、全篇を通じて一個人の權利を主義とする大精神、大感情の充溢したる一點は、頼もしく被存へんたる營利雑誌の中に立ちて、其獨自一己を保たんとするの苦心と、勵節とは、滿腹の同情を價し候。若し該雑誌の主張に照らして、各新聞雑誌の議論を、點檢批評して、俗論退治を企てられんには、一段の見物と存候。

(同日)

趣味多きを覺ゆ

燕塵は北京在留日本紳士の好事に成る雑誌にて、毎月一回づつ發行致し候。小生の今手に致し候は十二月號にして、第一資政院、大京遊記、上諭集は憲政史料なれど遙かに支那の時務を知らんと欲する者に取りて、極めて調法なるものにて、且つ其編者の心掛にや、一種の趣味、全篇に互りて饒きを覺え候。此上の希望は、支那の人物に就きて、簡短なる記傳様のものあらば最も妙に存候。支那の事、走馬燈の如く、小生三四年前に北京にありし時相知りし人物、殆ど一變してあるなし、其時事を觀察せんとするに、たづきなきを感じ候。北京にあるざる人は、猶ほ更ら此感あらんかと存じ候。(同日)

天公は公平に候

昨日曉起、窓外を望めば、白花紛々、遠山、近樹、皚々として凡て新天地を生じ候。此間、微軀少しく恙あり。朝來、閉戸、久しく忘却せる爐邊讀書の樂を飽まで享受致候。閒人の閒生活は、忙人、得意家より見れば憐笑に堪へざるべしと雖も、此中また優悠、自得の處もあり。天公は矢張り公平に御坐候。(明治四十四年一月二十一日)

春秋の筆法を用ふれば

無政府黨事件に關する諸新聞の論評を見るに、概して其滔天の罪を惡むと共に、此徒を生せしめたる、官僚政治家の罪を難するもの、如くに御坐候。蓋し彼等が激烈なる社會主義を唱ふるや久しと雖も、其無政府黨的の

恐怖政策を取らんと決したるは、判決文によるに、桂内閣の現出したる年の十一月に始まりたるもの、如く、春秋の筆法を用ふれば、桂内閣、社會黨を驅つて、無政府黨たらしむと云ふを得べしと存じ候。人の衣服を奪はんとするに、日の神は、熱を與へて、之を脱せしめんとし、風の神は暴風の力にて剥ぎ取らんとす。桂内閣は風の神となりて失敗したるものか。(同日)

御詠を紳に書せよ

曾て皇后陛下の御詠に『淺しとて、せかばあふる、河水の、こゝろは民の心なりけり』と云へる和歌ありしを記憶し、常に治國濟民の要訣、三十字の中に包含し盡されたるに感嘆致し居り候。平靜なること水の如きものなりと雖も、一旦、物に激すれば、山を崩し地を裂き、慘害至らざるなし。陛下が之を以て民心に比し給へるもの、古今聖帝明王の心事を道破し

給へるものにて、驕私、擅權、人心を激して省みざるが如き政治家等宜しく常に之を紳に書して忘るべからざることと存じ候。(同日)

猶腫物の如し

國に亂臣賊子あるは、猶身に腫物あるが如し。腫物は速に之を切らざるべからずと雖も、腫物を生せしめたる原因は、更に深くこれを窮めざるべからず。官僚政治家、政權を私すること四十年、今日の疾病を生じたる原因、此に在りと云ふもの、豈に一人の犬養氏のみならんや。聖主至仁、其恩光德澤の深き、萬物皆蘇息せざるなし。若し權臣、其恩光德澤を遮りて、下に達せしめず、訛傳妄想を生せしめたりとせば、知らず何を以て其罪を償はんとするか。(同日)

私語と風説とに遣らる

此頃新聞紙の記事や、クラブなどにて頻りに私語する所によれば、政友會は疾く已に、政府と妥協して、廣軌鐵道案を通過せしめんと内約あるよし申し居り候へども、小生は、其斷じて無根なる事を明言仕るべく候。且つかゝる事は、西桂兩侯の間の話頭にも上らざりしを信じ候。昨今の政治は、丸で封建時代の如く、私語と風説にて遣らるゝもの多く、而して政府は最も有力にして、且つ耳目に富むと信するより、兎角、政府の放ちたる反間苦肉の術中に陥ること少からず候。是れ新聞記者議員の最も心すべき所と存じ候。(明治四十四年一月二十五日)

欺かるゝを免れず

政府從來の遣り方を見るに、先づ政友會若くは進歩黨中に、微菌を植ゑ、此菌種に滋養分を多量に供與して、之を増大蔓延せしむるを常と致し候へ共、近來は憚る處ありて、政友會に此策を用ひる能はざるより、新聞紙と風説を借りて、議員の間に動搖を生せしめんとする手段を取るに至り候。君子も欺くに道を以てすべし。聰明なる記者も其惡む所に乘じ、若くは其好む所に投じて、種々の材料を供給せらるれば、自から、欺かるゝを免れず、是れ最も危険の時と存じ候。(同日)

能く親の心を知らん

昨今進歩黨の新聞紙を見るに、汲々として政友會中に、事あれかしと書き立て、政友會の新聞紙を見るに、矢鱈に進歩黨を惡し様に書き立つるを主とするものゝ如くに相見え候。人各々好惡あり、新聞紙にもまたそれぞ

れ職分あれば、有りし事を無しと報ずる譯にも行かざるべしと雖も、左様に敵、味方と競ひ立つべき時代なりや否や、主幹者の一考を煩はしたきものに御坐候。選挙區をのみ見れば、兩黨は仇敵に相違なしと雖も、天下を見渡せば、必しも敵にもあらざるべし。親の心、子知らずと云ふことはあれども、近世の子能く親の心を知らん。小生は兩黨の新聞紙が、大局より著眼せんことを、衷心より祈り申候。(同日)

また良友たらん

四郊壘多く、戎馬、河に飲む時、士君子、小異を立て、相攻伐するの時ならんや。苟も選挙區のみを本位とせば同黨中にも敵手あらん。若し天下を本位とせば、反對黨と雖もまた良友たらん。小生は兩黨先憂の士が、深く思を此に致さんことを望みて已む能はず候。(同日)

攻守共に一段の工夫を要す

一昨日は小開を得て、豫算委員の討論を聴聞するの機会を得候。小生の入場したる頃は、大石氏が頻りに寺内總督と渡り合ひたる時に候ひしが、小生は寺内總督の立場に同情を表すると共に大石氏の攻撃にも幾分の道理あるを認むるものに候が、攻守共に今一段の工夫ありてもよかるべしと思候。

武斷論の問題となりし時、山本悌二郎氏が、武斷とは新附の民に對しての謂にあらず、母國の民と新附の民とを、同一に取扱はんとするより生ずる結果なりとて、總督に注意を與られたるは流石に臺灣にて種々の經驗を得たる人の議論として、最も考量に價するものに候ひき。考量に價するのみならず、實は朝鮮問題としては、緊急敕令の事後承諾よりも、朝鮮公債

の始末よりも大問題なるに拘らず、豫算委員が之を取上げて、爭論を開始せざりしは、遺憾千萬に御坐候。蓋し我朝鮮政策の最弱點は、朝鮮に於ける『母國人の位置如何』の一點にあり、最弱點と申すは、殆ど未だ之を研究して、定論を有せざるがために御坐候。

植民地に於ける母國人を、土人と同一に取扱はんか。是れ土人をして、母國人を優種と思はしめず、従つて母國を畏重するの念慮を失はしむる所にして、植民政策の最も禁ずる所に候。さりとして母國人をして、土人を奴隸の如く取扱はしめんか、是れまた人種的反感を挑發するの恐ありて、また決して勧誘すべき政策には無之、此間極めて巧妙細心の工夫を要し候。或は當局の手心を頼むもの有之候へ共、斯かる大問題を手心に一任して愈愈官憲、擅横の弊を促成する譯故、是れまた決して勧誘すべき政策には無之、要するに法制上に、確固たる根據なくては、安心の出來ぬ次第に御坐

候。而して當局、此點に就きては、何等の成案もなき様子、是れ小生が朝鮮政策の最弱點此にありと申す所以に御坐候。

無政府事件に關する花井博士の質問、最も巧妙を極む。而して之に對する岡部司法大臣の答辯なるもの、最も晦澁を極め、人をして土方より一躍して禪寺の主人となりしもの、眞の禪宗坊主の法問に遇ひ、狼狽の極、途方途轍もなき答辯を與へて、却て之を走らしめたりと云ふ嘶家の昔嘶を思出さしめ候。傍人私語して、無感覺、無識見、彼の如くして調鼎の大役が勤まるものとせば、政治もまた案外、下らなきものならんかと申候は、必しも京童の惡戯とも見做すべからざるか。(明治四十四年一月二十八日)

今は四十四年に候

昨日は雨上りの好天氣にて、心地好く存候まゝ、正午桂首相の政友會員

招待會に參同致すべく、築地精養軒に赴き候。主人側は首相を初め、各大臣及び次官と云ふ顔觸にて、來賓側にては西園寺侯が、珍らしくも病軀を提げて來られたるを初めとして、黨老、中老より、各代議士、皆相揃ひ申候。主人側には小生の親朋なきにあらざるも、朝野、政見を異にするより久しく來往存問の禮を缺きしもの多かりしに、今日、ゆくりなくも一堂に會し、墜歡を拾ふことまた格別の愉快に御坐候。

當日の會合は尋常饌飲の私席には無之、桂公が時勢の運、人心の變に鑑みる處ありて、官僚主義を擲ち、政黨に頼りて國務を擧げんとする事、即ち世間に言ひ囁す流行語にて申せば、政黨本位主義を取らんとする旨を宣言せんが爲の集會なれば、實は我近世史上に、一記録を作らんとする大集會に御坐候。

桂侯は主人の事なれば、一場の挨拶せんとして、在朝在野を問はず、國政

に就きて意見の合一するものを合せざるべからざるを述べ、政友會の政見が穩健にして、常に國家に貢獻したるを賛し、情意相投合する以上は、今後、相依り相輔けて、以て國運を進めんと結ばれ候。今日種々の事情は、桂侯をして此より以上を語らしむる能はずと雖も、政界の事情に通じたる人々には、其何事を語りたるかは、十分明白の事と存候。

之に對する西園寺侯の答辭も、また多少邊りに遠慮する處ありてか、十分露骨ならざりしと雖も、猶此間の消息を想像せしむるものなきにあらす。即ち共に與に國家を擔當せんとするは、宿昔相與に誓ふ所なりと雖も、方策に至りては、また時に扞格なきにあらざりしも、今や政友會の地位、志望目的を認めて相頼らんと云ふ以上は、即ち扞格、解けて情意相投合するものにして、政治進歩の一轉機を生ずるものなりと云ふにありしが如くなれば、妥協とか提携とか云ふことにあらずして、其結果は、靜かに、併

しながら深く、遠く響くものあるを卜するに足らんか。
 小生の記憶する所によれば、故伊藤公は數ば山縣公と談合して、此種の事を行はしめんとしたりしも、遂に其事を見ずして終りしが、今や西侯、桂侯によりて成されたるを見れば、また以て時勢の變を知るに足らんか。昨日或る人、桂侯に到りて、其行動を難じたるに、桂侯之に答へて、今は明治四十四年なりと申され候よし。嗚呼、已に四十四年に候。今頃、彼是と非政黨論を持ち廻るものは、晝提灯と一般のみ、固陋家も最早開悟すべき時節に御坐候。(明治四十四年一月三十日)

朝鮮料理なども亦一興

一昨々日の植民學會は、頗る興味ある集會に有之候。第一の集會が寺内朝鮮總督の朝鮮政策披瀝の場たりしが如く、第二の集會は、大島關東都督

が、今後關東州に於て爲すべき施設の披露會と相成り候。今後は最早無言にして爲しさへすれば可なりと申す時代には無之、己も飲み込み、他人にも解らせて爲さねばならぬ時代に候へば、當局がかゝる集會を利用して、以て其施設經綸を披瀝する風の盛ならんことを祈り候。

同會食後の雑談として、或る人より植民地は、決して同化し得べきものにあらず。然るを同化せんなどと、種々なる細工を爲したりとて、失敗の上、失敗を重ねるに過ぎざれば、今後は同化政策などは、一切放棄して、宜しく之を統治するに止まるべしと申す議論を主張せられ候。是には植民學上の根據と、臺灣統治の經驗とより、贊成者も少からざる様子に御坐候。之に反して法制家は、同化斷じて爲し得べし、爲さざるべからず。若し單に偽善を行うて以て、一時を濟すに任せんには、他日必らず、之を悔ゆるの時あるべし。英國の印度統治の如き、統治して同化せざりし政策の餘

殃として見るべしと申す人少からず。之にもまた贊成者あり。或は植民政策が單に英國の任他主義と佛國の同化主義とに分れて、最早相場が極りたりと思ふは大早計なり。日本が朝鮮を有するは、其人文、種族の距離、決して英國が印度やアフリカを有すると、同一に論ずべからずとて、同化論を助くる人も少からず、それより談話に花が咲き、小生の朝鮮政策論に攻撃を加ふる人も少からず。或はまたエルサス・ロートリンゲンが、自治を得たるに引きて、植民地の自治決して望なきにあらず、恐るべきにあらずと申す人も有之候。

同會は、遠からず専門家の筆になる論文を集めたる報告を發行するよし。其世用を爲すこと少からざるは、今より豫期せられ候。且つ次の集會には、豫じめ論題を定めて、會員に通告し、且つコロニアル料理を、食卓に上す計畫のよしに候。ジャガア料理、朝鮮料理など、また一興ならんと

被存候。(明治四十四年二月一日)

第一人に御坐候

森槐南氏の死に於て、我文壇は其最大なる明星の一を失ひ候。同氏の聲は下谷の茉莉吟社に於て發せられて、後には絶東に於て、最も高朗なるもの、一に數へらるゝに至り候へば、同氏を失ひたるは、獨り其友人親朋の損失のみにあらずして、我社會一般の大損失に御坐候。槐南氏の詩、先きには明清の瑰麗なる所をねらひ、後には一轉して文選などを以て期したるが如く、相見え候。其詩には『横ニ絶大空、具ニ體萬物、荒々油雲、寥々長風』と申す所少なきも、『如ニ鑛出シ銀、窈窕深谷、時見ニ美人、碧桃滿樹、風日水濱』と申す様なる風あり、詩學と、洗鍊に於て第一人に御坐候。(明治四十四年三月九日)

英雄の末路憐む可し

外國新聞は、サア、チャールズ、シルクの計を報じ來り候。シルクは老チエンバレンと時を同うして起り、虞翁旗下の雙壁、自由黨中の劉艾、鐘會と目せられ、兩人ともに赤熱共和黨を以て目せられしものに御坐候。而してチエンバレン、帝國主義の下に、植民地統一を企つれば、シルクは大英國論を著はして、開境展出を講ず。其出所進退の略ぼ相似たるも、また一奇に御坐候。彼れ冤禍を受けて世論の攻撃を招き、一蹶してまた起つ能はずと雖も、常に思を外交關係に致し、人を派して獨佛の陸軍を調査せしむるなど、再起の志絶えずと雖も、ヅイクトリア女皇其朝廷に列するを好ませられざりし一事は、其捲土重來を妨げ、遂に失意の中に没落したるは、英雄の末路頗る憐むべしと申さざるべからず候。(同日)

屑々婦女の事のみ

國民黨は、遂に無慘にも木下謙次郎氏を除名致し候。政黨の除名は裁判所の判決にあらず、斬るも、迎ふるも、一切皆政治に外ならざれば、何の證據などと申す能はずと雖も、これは確かに一の失敗と申すの外なく候。若し桂派と聯盟せんとしたるを罪名とせんには、國民黨の一半、悉く除名せられざる能はざらん。若し、罪一人にありと云はば、木下氏は改革派の首領たるか、然らずんば改革派の罪を償はんがために十字架に上りし使徒と云はざるべからざるか。思ふに政黨の事、順逆ともに一時のみ。舊怨を思ひ、舊恨を追ふが如きは、屑々婦女の事にて、其大を爲す所以にあらざるべく、苟も病源の除かれざる、一の木下、死して、更に第二の木下を生せんのみ。(同日)

今少しく史實あらば

一昨夜少閒あり、机上の新聞を亂抽致候に、『畿内見物京都之卷』は、其装釘の美しさに於て、第一に小生の目を惹き候。此書、繪と文と併せ遣るものにて、繪は淺井忠、中澤弘光二氏の手になり、文は高安月郊、與謝野晶子、蒲原有明、薄田泣菫の手に成り、名は京都見物とて、道者案内書めきたるものなれども、立派なる文學的作物に候。京都を見んと欲するに、其舊事を記せし書籍すら容易に得がたく、而して舊京漸く變じて、新京とやらんとする過渡の際に、何等、京都を語る著作なきを嘆じたる小生は、かねてよりかゝる著作あらまほしと思つたる所なれば、深甚なる感興を以て、此書を迎へ候。作家は皆當世の才人、其文、其繪、間然する所なし。唯だ小生は其文學的に過ぎたるを憾むのみ。今少しく史實ありて、ウヲタア、

ペーサントが、ロンドンを描きたるが如き部分あらばと存じ候。蓋し舊京の美は、其歴史的感興が大部分に候へば也。序ながら、小生は文淵堂主人が、東京につきての此種の著作を文人に慫慂せんことを希望致し候。

(明治四十四年三月十三日)

治人あつて治法なし

『清國行政法』は、臺灣政府の發行せしものにて、其第二第三卷を出し候。右は法令、制度、習慣等より行政法を編出したるものにて、其名は著作ななれども、其實は新たに制度を制定したると同一の勞苦と可申候。此書を見れば、清國の行政法は、随分行届きたるものにて、決して我國などに劣りしものにあらざるを見るべく候。然しながら、此美麗なる制度も、清人の惠澤とならざるものは、政治上の根本法たる、政府の責任の歸著なきが

爲に外ならざるを思へば、所謂治人あつて、治法なしの格言も、今更思ひやられ候。(同日)

現代は知らざる可らず

有賀長雄氏の『最近三十年外交史』は、上下二卷にて完備し、上は三國同盟の現出より、下は日韓併合にまで論及す。現代は人の最も知るべくして知らず、知るを得ざる所、有賀氏即ち綜合述作して、由來、情偽を明かにし、近世外交の關係、脈絡、整然として恰かも、名醫が外科刀を執つて解剖するが如くなるを覺え候。之と同じく、出版せられたる巽來治郎氏の『極東近時外交史』も、また漸く我等の記憶より脱せんとする外交上の出來事を編輯したるものにして、確に有益なる述作と申すべく候。(同日)

練り合せの丸薬ならんのみ

數日前紐育へラルド社の東京在留記者ハリソン君、來訪、日墨秘密條約説に就きて、卑見を徴せられ候に付、小生は全然之を以て莫須有の事となし且つ途中に策源地となるべき足場を有せざる、四千哩以外の地に、彈丸黒子の如き貯炭場を作りて、本國と相策應せんとするが如きことあらば、是れ我戰鬪力を弱むるものにして、何は兎もあれ戰略の上より根據なき風説なりと申しおき候。同氏は直に他の當局、新聞紙などの意見と共に、右を電送せられしよしにて、米國の人心も一先鎮靜に向ひ候由。恐らくは是れメキシコ人、日本に頼らんとするの心と、東洋汽船會社の貯炭所一件とを練り合せたる、外交的丸薬か。一笑の外無御坐候。(明治四十四年三月廿八日)

友人なるが故に切望致候

日米の關係は、極めて微妙圓滑に取り扱はざるべからざると共に、極めて率直大膽に取り扱はざるべからず。此間最も大手腕を要し候。昨日の東京毎日新聞に『米夷屠るべし』と申す社説相見え候に付、人々、一驚を喫し、其文字の矯激、不諱なる、眉を顰め候へ共、該記者をして、此くまで憤激せしめたるカリフォルニア州會の論調が、如何に深く日本國民の自尊心を傷くるかを察知するに足るべしと存候。小生は米國の友人、最も偽はらざる最も率直なる友人に御坐候。友人なるが故に米國の識者が、今より遠く慮りて衆人を導きて、正路に歸らしめんことを、切望致候。(同日)

之は是非もなし

政友會新幹部の選抜は、最も其人を得たりと可申候。奥氏、愛嬌を賣るの巧致なしと雖も、其氣魄ある、擔當ある、決斷ある、同會中有數の人物にして、他の僚友等、また皆其人と組合せとに於て、成功したりと可申候。但し今一人位、所謂硬派なるものより選抜せんには、最も妙なりしならんと思はるゝも、之は是非もなし。小生は、諸君が卓勵風發、新氣運を促成し、以て老廢萎微の風を一掃せんことを切望し、且つ期待するものに御坐候。(同日)

花神に背く二十年

廿七日高田慎藏君、其湯島の邸に知人を集めて、園遊會を催され候。小生は近來頓と社交を怠り勝にて、毎に親朋より小言を受け候へ共、同家の珍藏中最も有名なる弘法大師作、不動明王の畫幅を一見せばやと存じ、常

例を破りて出かけ候。

家は湯島の懸厓の上にありて上野の臺を眼下に見、本所深川の平地も雙眸の中にあり、園庭の一半は厓下にありて來客は峻坂を上下するなど、極めて奇趣あり。小生は此庭園のみにも常例を破りたるを悔いず候。況して所謂大師の不動像を見るに及びては、感嘆之を久しうし、暫らく躊躇して去るに忍びざるの感有之候。其畫品の崇高なる、其筆力の遒勁なる、其筆墨の痕に、精神の存在する、一幅不動の畫、恰かも火焰と共に、動き出さんとするものあるが如くに被覺候。小生書畫骨董に於ては、何等のクレームをも有せず候へ共、最上の美術は、素人をも敬服せしむるものならざるべからずと云ふ格言に照らして、神品と申すべきものと敬服仕候。

該集會に珍らしかりしは、各國大使公使の顔觸の見えしことにて、夫人等まで、皆嬉々と樂しみ、然も大成功に終り候。近世、人々事おほく、昔

日の如く親朋知人と雖、數ば相會する機會少なく候へば、かゝる集會ありて、互に墜歡を拾ひ、舊交を温るを得るは、我社交生活の進歩として、深く之を賀せざるを得ず。殊に我縉紳等、國人と相會することは、之を勉むるも、外國紳士を招くもの極めて少なく、殆ど絶無と申すべきほどなるに方りて、同日の如き趣向なりしは、内外交際のため深く之を感謝せざるを得ざる次第に御坐候。

歸途上野の山下を通りて、臺上を瞥見するに、春色已に六七分なるが如くに候。小生東京にある既に二十餘年なれども、上野の花を見たるは三四回のみ。常に花に背き候ゆる、今年は飽まで花神に酬いんと存じ候へば、此より芳事頗る多忙を極むべく、従つて閒話も、暫らくは閒却せらるべきかと存じ候。(明治四十四年三月三十日)

官職と人物との混同のみ

數日前、某大官を新橋停車場に見送りたる友人、歸りて喟然として大官勢力の雄偉なるを稱讚して、民間黨の人なきを嘆息致し候。小生笑つて友人に告げ、足下は某氏の官職と、某氏の人物とを混同するが故に、區々の議論ある譯なれども、假りに赤裸々の人として、兩者を比較せんには、其言必ずしも當らざるを知るべしと申し候。蓋し熱に附き炎に隨ふは、人情の弱點にて、斯くすれば利益ありと思ふ人々のみならず、かゝる利害の關係なき人すらも、權力に阿附するの習なれば、權門が多くの人と、謳歌者を生ずるは、自然の勢に御坐候。之を思へば、與ふべき利益なく、誇るべき官職なくして、而して尙幾多の友人を有する民間士人の方、幾何勝れるかは、言はずして明白に御坐候。(明治四十四年五月四日)

英雄には無御坐候

クロムウエル得意の日、其行列を讚嘆せんがため、ロンドンの市民、雲屯霧集致し候に會うて、赤鼻漢は冷然として、此讚嘆者は多しと雖も、余若し絞首臺上に登るの日あらんには、群衆の數は更に多からんと申し候。眞に爲すある人は、漠然たる評判と、眞の友人とを區別致し候。英雄、勢を用ひるも、勢に用ひらるゝは英雄には無御坐候。(同上)

今猶古の如し

張良の墓中より掘り出されたりと稱する素書が、偽書たることは申すまでもなければども、其中往々、智慧なきにあらず、中にも『信ずる所の者、任ずる所の者にあらず、任ずる所の者、信ずる所の者にあらざるは亡ぶ』

と言ふ一句は、古來の興亡を説明して盡せりと申すべし。古、此の如し。今猶此の如くなるべく候。(同上)

餘裕か無頓著か

京阪の士女は生活を一の技術として研究し、東京の士女は殆ど全く之を知らず。技術として研究するがゆゑに、最も廉價に、最も美衣美食して、而して最も愉快に生活することは、關西人の長所に御坐候。歐洲などにては、堂々たる政治雜誌などにて『一週間十五シルリングにて生活する方法』と云ふが如き論文が、知名の淑女によりて草せらるゝこと少からざるに引かへて、我國にてはかゝる問題すらも提出したるものあるを見受けず候。我國民の生活は猶原始的の餘裕ある證據にや、將た依然として無頓著なるがために候や。(同上)

活力の徒費に堪へず

暴貴の人、往々にして野人の本性を示すが如く、我國家、海表に崛起して大國民となりしに係らず、往々にして小國民の術數を脱せざるもの有之候は遺憾に被存候。即ち露國に對する政策の如き其一例に御坐候。

我國若し露國と親睦して、以て百年の平和を維持せんと欲するならば、宜しく堂々として其政策を中外に示し、百論の一段によりて此政策を進むることを怠らざるべき筈に御坐候。之は獨り文武官僚の來往位の小事にて、足れりとは云ふべからず、國民の秀粹なるものと、其事を共にするにあらざれば容易に爲し得べからざる處に御坐候。政府が三年前、露國と滿洲協約を交換するや、小生は其の兩國の爲に謀りて最も得策たるを思つて之を歡迎致し候に、此事は是ぎりの尻切れトンボとなりて、終了したるが

如く、爾來、政府は此協約を中心として、兩國親睦の氛圍氣を醸養するに就きて、何等の手段を盡さず、誤解と猜疑の湧き次第に一任するが如くなるは、如何なる理由にや、小生等には頓と了解致し兼ね候。若し我國が露國と必争の意あるならば生中の辭令を交換するの必要もあらざるべく候。然らずして眞に相親睦する積ならば、今日の如く冷ならず、熱ならざる微温的の應酬を廢し、切實に我誠心を敷きて、露人の心に印する様の實ならざるべからざる事と存じ候。故なきお世辭を並ぶることや、意あつて行ひ得ざることは、大國を憚かりて遠慮勝なりし、小國民時代の陋風に御坐候。一人に於ても情面主義や、微温的舉動は、敵を疑はしめ、味方を敵たらしむる所以にて、外交の上、最も禁物に御坐候。

聞く所によれば、過日我政府は北邊露境の清領に、領事館を開設したるに、露國之に平ならず、七八人位の日本人を保護せんがため、領事館を設

くるは、日本政府の意、人民保護にあらずして、軍事偵察のためなるべしと申し出候處、日本政府は之に答へて、領事館の開設は、國人の多少に係はらず、露國は一人の露國人を保護せんがため、朝鮮に領事館を設くるにあらずやと申し候由。疑ふものも、疑ふ者なれば、答ふる者も答ふるものにて、丸で三百代言の推問答としか聞え不申候。此の如くして、兩國の交情の、親且つ厚からんことを望むも、無理と申すべきのみ。

絶東平和の關鍵は、二國の親睦にあること申すまでもなし。小生は我當局が屑々たる微温政策を止め、堂々と男子らしく、親露政策を宣示して、以て前途の安全を謀らんことを希望して、已まざるものに御坐候。國家爲すべきの事業多し。北方の悪夢のために、活力を徒費するに堪へず候。

(明治四十四年六月八日)

氣力の組織訓練陶冶に在り

英國今上陛下は、本日をして即位式を行はるゝ由。テムス河上近世バピロン府に於ける、壯大雄偉なる光景、想像に堪へず候。小生は同盟國人の一員として、衷心より此日を祝し、天恵の永へに該皇室の上在らんことを禱ると共に、皇家を翼賛して、雄大なる國家を立つる國民の氣魄と政治的才能とに對して満腹の敬意を表し、其國運の益々炎盛ならんことを禱り候。

抑も地理上より申せば、英國は北方の一邊鄙として、理、よろしく、スウキデン、ノルウェーなどと、伍を爲すに止まるべくして、勢は然らず。政治上に於ても、貿易上に於ても、文明の上に於ても、世界の中心は實に此にありて、列國相競うて茲に朝宗するが如くなるものは、實に一大不思議と申すの外無御坐候。英國とても、決して無限の黄金を産み出すミダスの金槌あるにはあらず。要は國民の剛健にして雄偉なる氣力と、此の氣力

を陶冶集合して、内に於ては善制良法を布く力たらしめ、外に向つては進張の政策を取らしむる政治家の力とに外ならざるべきか。

瘠土の民は、勞作して、沃土の民は、懶惰なり易し。其初、英人が一定の祖國なく、北方の瘠土より稍々温暖なる海上を縦横する一種族たるに過ぎざりし時、事に當りて慄悍にして避くる所なく、執一して移らざる心性を示すや、歐洲大陸の帝王中には、其他日必らず新帝國を立つるものあらんことを豫想して、畏るゝ所有之候が、此豫想は豫期せられたるよりも早く適中して、居然たる一大國家を生じ、果然大陸を威迫するに至り申候。人或は單に之を以て、國民の氣力にのみ歸するもの有之候へ共、何れの國民か氣力なからん。此氣力を陶冶し、陶冶せられたる人民を組織するによりて、始めて勢力を生ずる譯にて、英國今日の成功は、實に國民の氣力と、此氣力を組織訓練したる政治家の力とに歸せざるべからざるものに御坐候。

蓋し組織と、訓練と、理想なき氣力とは、適以て衰亡の論たることなきにあらず。英國の如きも數十年の間、封建諸侯の私闘、王朝平人の抗爭、宗教的改革騷動等のため、人民、其生を聊せざるほどの窮狀を生じたるも、議院政治の萌芽、早くより之れありしがため、國難、民災の度ごとに、此制度を助長し、之によりて國民の活力を組織、集中、陶冶するを得て、遂に今日炎隆の勢に達したるものにして、議院制度を外にしては、決して英國今日の隆運を想像する能はざるものに御坐候。小生は我國民が、同盟國の慶事を祝するに方りて、一隻眼を具して、之を觀察せんことを切望致し候。(明治四十四年六月二十三日)

葉公眞龍に駭くの類

當初、一團の陰雲の如く、中ごろ僅に爪端を示めしたる朝鮮師團増加案、

今や龍身の全部を示現致し候。聞く所によれば、廟議、これに決したるもの既に久しき由。是にて神經最も鋭敏なる經濟社會が、過日來、賣りの一方、悲觀説のみに傾き來りし理由も明白致し候。小生は朝鮮併合の結果、必ず此に至るべしと豫想したるが故に、當初より併合策に反對致し候譯に御坐候。當時滔々たる世論、小生の反對説を見殺しにして、今や即ち師團増加説に驚かんとす。是れ豈に葉公、真龍を見て駭走するの類には無之や。(明治四十四年六月二十五日)

鐘聲濕りて雨至る

政界の事、蓋もあれば底もあり、表もあれば裏もあり。鐘聲の濕れるを聞きて、雨の至らんとするを卜するもの最も政治に尙ふ所に御坐候。小生は、世間朝鮮併合を賛成して、二師團増加の熱湯を飲まされんとする民間

政治家が、熟慮深省、權變機略の表裏を觀察せんことを希望致し候。但し小生は過去に就きて申すにはあらず、來者につきて申す譯に御坐候。彼の權變は此機略を生み、此機略は他の權變を生み可申、此間の事、眼光、徹底の人にして始めて感得し得べく候。(同日)

應接策を聞かん

太平洋問題と申せば、世間、學童問題や營業禁止法の報復のみと想像致候へ共、左様のものには無之、洋上の航海權を制することが、何より必要の事に御坐候。聞く所によれば、カナチアンパンフキック會社にては今回一萬九千噸の巨船に、二十三海里の速力を有せしめて、之を以て太平洋の權力を争はんとするよしにて、此巨大なる姉妹船は、四十六年を以て太平洋に回漕せらるべしとの事に御坐候。列國の勢力駭々として太平洋に淮聚し

來ること、此の如し。我當業者、何を以て之に應接せんとするか、聞かまほしく存じ候。(同日)

報酬を求めざる愛情

犬のために愛憐の情を表し、箝口令を改めて、他の方法を以て之に代はらしめんとするもの、學士會中の有志團體あり、動物愛護會あり。我敬愛する都新聞記者、また昨日の社説に於て、此愛憐運動に同情を表せられ候。小生は此愛憐の情が幾何、警視總監を動かすかを知るを得ず。去りながら此かる報酬を求めざる高尚なる愛情が、我市民によりて表白せらるゝ一事にても、頗る心地よく感ぜられ候。(同日)

是れ名卿巨公の座右の銘か

慷慨と悲觀は、小生の字典中に無之文字ながら、昨今の世態人情を見ては、ドウヤラ此文字の必要を悟る様に相成り候。蓋し當今の國民的疾患少からずと雖も、國柄を握る官吏、國事を論ずる政論家が、情面を重んじて、徹底の論なく、推諉を事として、擔當の氣魄なく、局部に拘泥して、大局の著眼なく、唯無日に今日を了すれば、則ち足ると云ふが如き、不眞面目なる心理状態を有する一事に御坐候。此の如き心理状態は、一見して甚だ危険ならざるが如しと雖も、人心に於ける白蟻にして、其恐るべきは、所謂危険思想よりも甚しく御坐候。

財政調理の任に當る者に對して、國政を論ずれば、貴説誠に一理あり。併しながら、陸軍あり、之を如何ともする能はざるを遺憾とするのみと申し候。海軍を整理して、太平洋の危険に備へんには、爲すべきこと少からず。儲之に就きて當局と論ずれば、貴説至極尤もなれども、大藏省の承知せ

ざるを奈何せんと申し候。

戦後の經營なるものは、期年の間に日本を一變して工業國たらしむるにあり。然るに事實に於て然る能はざるは何ぞやと論ずれば、商政の當局は之に答へて、工業教育は工業立國の本にして、國家の教育は一時工業教育に偏傾せしむるを要し候へ共、文部大臣は祖先崇拜や、家族制度のみを心配して、工業教育の普及に勉めず、是れ工商の振はざる所以なりと申候。

朝野の政治家、共に等しく人材の必要を説かれ候。さりながら若し人材を出せば、不幸にして國家の制度と社會の風尚は、此人材を草亡木死せしめずんば、已まざるが如くに相見え候。而して人材の必要を説く政治家が此惡制度を廢して、人材を推挽するを聞かざるは不思議に御坐候。

昔時、巧みに世に處したる才人あり、後人を戒しめて、世間の議論甚だ多きも、概して三回も之を躲過すれば消ゆるものなり。努め眞面目に之と

争つて其敵意を挑發するなかれと申し候。嗚呼是れ當今の名卿巨公の座右の銘には無之候哉。かゝる人物が跋扈し、かゝる風尚が盛なる時は、才略識見あるものは、一變して世を逃れ、若くは世を玩ばんとするに至るべし、曠達の風此に生じ、蕩游の俗此に起るべし。是れ警世の志ある者の深く寒心すべき時と存候。(明治四十四年六月二十九日)

廟堂湖海志を易ふるは如何

淫雨連日、流石の俱樂部通も、昨日は半日家居、筆を揮つて春來の書債を償却致居候處、一雜誌の經營家、來訪、四方八方の雜誌の末、雜誌經營の困難話をせられ候。其言ふ所によれば、當今雜誌經營の困難は、昔日の如く、讀者を得るの難きにあらず、資本を集むるの難きにあらず、要は論文を得るの手腕如何にあり。而して論文家の少きは、最も苦心の點なりと

の事に御坐候。

右に就きて思ひ出すは、外國に於ける雜誌論文家の多き事と、而して報酬の多き一事に有之候。英國はフォートナイトリーヴウ、若くはナイテールンセンチュリー、若くはコンテムポラリーヴウなどを初として、流石に雜誌繁昌の本國として、申すまでもなく、歐米各國皆外交若くは文學評論の評判家として、毎月執筆するものは格別として、各雜誌、毎號、論評報道する所、皆其人を異にして終年盡くる所なし。海軍退役將校が製艦方針に就きて論ずれば、退隱の外交家は外交の現狀を評し、大學教授が、科學上の發見に就きて論ずれば、名門の婦人、貧民生活の方法につきて論ずると云ふ有様にて、彼士の縉紳、學士、名婦が、其朝廷の大官たると、江湖の逸民たるとを問はず、思ふ所を語りて、以て現代に寄與せんと欲する盛意、歴々と領略し得べく候。我國、文筆の士、少からず、唯だ文章を作

りて以て快とするものに就きて云へば、我國は決して泰西諸國に劣るものには無之候へ共、文章の讀まるゝは、其行文の巧拙如何にあらずして、其中に藏せらるゝ意見如何に有之候。若し我國に論文家少なしとせば、我士君子、國事、學術の問題に就きて、考ふる所少なきもの其原因ならんか。我國にては外交、軍事、財政に付き、今や最も評論を要する時なるに係らず、外交に就きては一の林伯が、時に龍爪を現はすの外、曾て外交に關係したるものが、外交を論ずるを見受け不申候。況んや陸海軍に至りては、一人の非役軍人が、正々堂々、其意見を發表するものあるを見受けず。夫れ國家が四十年來、彼等を覆育し來りしもの、豈に俸給を受くる間は、其力を費すも、官職を離るゝと共に、外交軍事が、其念頭を去るを目的としたるものならんや。此に至りては、小生は寧ろ晴るゝも、曇るも、降るも、照るも、國事を論じて已む事なき民間論客の、愛國心を多なりとせざる能

はず候。

古の忠臣の謙辭に、廟堂の高きに居るも、江湖の遠きに居るも、君を愛するの心は一なりと申す文字有之候。今の縉紳、若し江湖の遠きに居るも、其心廟堂の高きに居ると同じくば、其君國の爲に言ふ所、宜しく文壇を賑はすべき筈に御坐候。(明治四十四年六月三十日)

舉動曖昧にして浮説生ず

昨日内務省に奉職する一紳士來訪致され、席上、新聞紙の三面を賑はす悪書生の婦人脅迫などの談話出で候處、該紳士の申さるゝには、警察官は無論、婦人保安の責任を擔當致候へ共、婦人自らもまた、多少の防禦なくしては、困却致候へば、婦人は矢張古の如く、懷劍位の用意はありたく、また黄昏の後矢鱈に外出すると云ふ様なる事のなき様致したしとの事を語

られ候。小生は右に對して、文明の今日、婦人が懷劍なくしては外出が出来ぬなどとは、以ての外の事にて、取り擧げて論ずるまでもなき事なりと評し居り候。若し婦人が懷劍を要するならば、男子もまたピストルを持參せずしては、外出すべからずと云ふ結論に達すべく、斯くては國家の威力も、文武の権力も、何の效能もなく、丸で無政府の状態と申すの外なし。是れ豈に國家四十年來、文武の力を樹立するに勉めたる所以の志ならんや。一笑の價すらも無之候。

但し右は當局政府の責任につきて云ふ事ながら、婦人各自の自衛の點より申せば、夜間矢鱈に外出すべからずと云ふ一事は、大に考ふべき事と存じ候。凡そ婦人が夜間、獨行すること、我都會の如きは、多く他の文明國に見ざる所にて、其文化の進める都會ほど、婦女子夜間の獨行少く、若し外出せんには、必らず相應の男子の伍伴ありて之を保護致し候。然るに世

間、歐米と云へば、婦人は無制限に自由なるものと早飲込みして、近時女性
性の夜間外出益々多きを致し、世間公衆もまた之を怪しまざるは、不思議
と申すの外無御坐候。昨年なりしが婦人教育に關係ある人々が『婦人勿れ』
數十箇條を制定致候時、多くの新聞雑誌は之を冷笑に附し候。而して其内
容を見るに歐洲にて實行しつゝある婦人の『嗜』を並べたるものにて、如何
にも尤千萬なる事のみ候に、世論之を冷笑せるを見ては、世人の不心得
をトし得べく候。

斯の如くして東京に於ける婦人は、夜間獨行の機會多く、従つて無賴漢、
悪書生の乗ずる所となるの機會多く御坐候。而して婦人が彼等に接近せら
れたる時、また權利の念弱く、自尊の氣象に乏しく、言語舉動、甚だ曖
昧にして、遂に、傍人の猜視、合璧の浮説を生せしむるに至るもの少から
ず候とは如何にも口惜しき事に候はずや。小生は東京の良家、教育家、官

憲が、相共に戮力して、第一に婦人自尊の念を、鼓作し、第二に自尊の念
ある婦人をして、夜間獨行するは、賣笑婦人と間違へらるゝも詮なきもの
なるを覺知せしめんことを、希望致し候。是れ些々たる風俗上の一小事の
如くなれども、革風移俗の大題、此中に含まれ候。(明治四十四年七月五日)

旅行は人生最大の快事

柯公大庭君、其近業『南北四萬哩』を惠贈せられ候に付、欣然、披見、
燈前半夜、蚊子の手足を襲ふを忘れて、讀了致し候。近時、實の入りたる
述作少からざる中に、小生は此書を以て、最も趣味に饒なるもの、一なり
とするに、躊躇不致候。

若し夫れ其記述する所の範圍に至りては、最も廣大なりと申さざるべか
らず。即ち西北は歐洲諸國より、中央亞細亞、波斯に及びて、南の方、南

阿弗利加より、北亞米利加に及び候。我國にては此の如き大旅行を企てしもの、少きは申すまでもなく、歐洲にても此著者の如く、足跡五洲に互りしもの多からざるべしと存じ候。昔マコーレーの英國史を著すや、一行の記事のために、一哩を旅行して史蹟を見たりと申され候。今此書、四萬哩の記事を、三百ページの中に包容す。此一事既に此書を読むに足ると存じ候。

著者は流石に耳目鼻口の五感の外、『新聞記者感』を具有する記者の事として、匆忙なる旅行中、必らず其旅行の記念となるべき一事を抽出するを怠らず候へば、其記事、皆生氣あり、文章簡潔にして練達、色彩淡泊の中、往々にして詩趣の湧くものあり、歴遊の、風土、政治、人情より産業状態に至るまで、行間に彷彿致し候。但し墨痕淋漓たる大輻の中、間々著者の身を中心としたる逸事、閒話を投入して、細目を補はば、更に一層の妙

味ありしならんと被存候。

蓋し旅行は人生最大快樂の一にして、行程を進むるに従つて、眼前の景象の、演劇の如くに變化する一事、人の精神を刺戟すること、恰かも土地を掘り返して、清水を灌ぐが如し。是れ政治家、宗教家が、其大業を開始するに先ちて、常に多く旅行して以て其精神を養ふ所以か。

余、平生四方の志あり。阿弗利加一週の旅行は、最も熱望する所なれども、之を遂ぐるの時なからんことを思うて悵々僅に歐洲人の旅行記を讀みて、以て自から慰むるに過ぎず。今、著者即ち、余の爲し得ざる所を爲す、羨望禁すべからず候。(明治四十四年七月七日)

始皇の坑儒よりも甚し

數日前、同好の學者數人、偶然一堂に會し候節、一博士、學生の試験に

際し寛大なる點數を與ふるもの、兎角人望あれば、學生に人望ある教授、必ずしも良學者にあらずとの説を出し候處、一學者は之を駁して、人望ある學者、必ずしも良學者にあらざる事は、謹んで命を聴くも、點數に寛大なるもの、必ずしも人望あるものにはあらず。某教授は有名なる濫賞家にして、點數の寛大なること、殆ど無制限なれども、其人篤學ならざるが爲に、學生の人望地を拂つて空しと申し候。

右等の談より、自然今日の試験制度の利弊をも論せられ候が、今日の文官試験、及び學校試験、共に試験の本旨を誤解する處少からずと被評候。一博士の説によれば、某氏が文官試験を受けし時、憲法論に關して、時の試験官と意見を異にしたるがために、落第したりとの事に候。また一博士の談によれば、某氏また憲法論に關して、一家の見を有して、教官と結論を同うせざるがため、學位を受くる能はざりしが、此人後に博士會の推薦

によりて、博士となりし例有之由に御坐候。右は全く試験の性質を誤解したる結果に外ならざるべきか。

案ずるに試験なるものは、受験者の頭腦如何に活動し、其學殖の如何に深く、其觀察の如何に慧敏なるかを知らんと欲するの具にして、其議論必ずしも試験官の信仰と一致するを要せず。相當なる學殖あり、相當なる手續を経て相當なる判斷を下すの力ありと見れば、即ち可なる譯に御坐候。是れ猶習字の試験の如し。其人、顏魯公を學ぶも可、歐陽詢を學ぶも可、其筆力雄健勁拔ならば、之を取ると云ふことが、試験の本旨に御坐候。若し筆力あるも字法あるも、字形字體、子昂の如くならずんば、即ち之を取らずと云は、淺狹亂暴の極と申さるべからず。今日の試験官が、一の成見を有し、此成見に合せざるもの、悉く之を排せんとするは、即ち是に類するものにあらざるか。

支那の科擧の制度も、其本源必ずしも悪しきにあらず。然るに文は必ず四六駢體、句は必ず古文の剽竊と云ふことに一定して以來、學生の自由、生氣、全く亡滅して、國家の荼毒と相成候。識者が科擧の試験制度を評して、秦始皇が儒者を生理にしたるよりも、有毒なりと申候もの偶然にあらず。今日我試験制度も、其方法を改善せずんば、恐らくは適まで學生を無用の桎梏に苦しめて、之を天死せしむるに終らんか。是れ一世の識者の深く戒心すべき所と存じ候。(明治四十四年七月十八日)

是が即ち外交にて候

獨逸が軍艦を以てモロッコのアガジールを占領するや、小生は是れ獨り佛國の憂のみにあらず。地中海と大西洋に於ける、英國の權力を控制せんとするものなるを以て、英國必らず黙視せざるべしと申し候處、果然、一昨

日の諸新聞に散見するが如く、英國總理大臣アスキイス氏の示威的宣言となり、在野黨の首領バルフォア氏の舉國一致演説と相成り候。是にて英國も、愈々其假面を脱却して、陣頭に現はれたる譯なれば、大勢滔々、速に歸著すべき所に歸著可仕候。

偕此くまで進み來り候外交的イムプログリアを觀察するは、傍人に取りて、興味淺からざる事業に御坐候。獨逸に戰意ありや、今日迄の所にては無之と申べく候。獨逸に戰備ありや、今日迄の所にては無之と申すべく候。然らば則ち何故に、獅子の尾を踏みて、此くまで怒號せしむるに至りしかと申すに、審勢の術數を過ちたるものにして、其責一にロンドン駐在メツテルニヒ大使にありとの事に御坐候。近年、獨逸の位地は、恰かも頼光の軍勢に圍まれたる『蜘蛛の怪』の如く、個體としての怪腕及ぶものなしと雖も、英佛協商に圍まれ、英佛露協商に圍まれ、日英同盟すら遠く之を圍むと云

ふ有様故、其政策は第一に英佛の間を冷却せしめ、漸次、他の關係を冷却せんとするに有之候。乃ち近日、好みて英國と接近せんとしたるが如き、また此術數に外ならずして、一時、頗る其效を奏したるが如く相見え候。メツテルニヒ大使、此形勢を見て、機は已に熟したり、英佛間の冷熱如何をトせんが爲に、一骰子を投ずべしとて、獻策したるもの、即ちアガジール占領策に有之候。

右の如くなれば、獨逸は初より戰意もなく、従つて戰備もなく、唯其真意は、英佛の交情、如何をトせんとするにありて、あはよくば實利を收めんとしたるに過ぎざれば、英國の決心、山の如くなるを見ては、必ず相當の名譽を携へて、退却するに終るべきか。

世間或は西班牙の跳梁に見て、背後に獨逸ありとなすも、必しも然らず。近年、佛國の外交頗る振はず、且つ縝密の注意を缺くを以て、西班牙を怒

らして此に至らしめたるものにして、英國に親しき西班牙の無遠慮なる行動は、寧ろ獨逸をして、英國の佛國に對する心事を誤解せしめたる一原因ならんとの事に御坐候。此際最も面白きは、肝腎の當局佛國が、冷靜なること石人の如く、モロッコ問題を取扱ふこと、恰かも、領事館事務にても取扱ふが如くなるに反して、英國が眞赤となりて憤怒する一事に御坐候。然れども冷中、熱意あり、熱中、冷味あり。是が即ち外交に御坐候。

(明治四十四年七月三十日)

明月重ねて來るの感あり

鈴木天眼君は一世の奇才、其文また逸宕にして奇氣に富む。君が中央文壇を去つて、長崎の地に隱居放言するを見て、一世之を惜しみ、其文壇を去つて議會に入り、豫算の毫厘や、法令の刀筆文字に心身を勞はるや、一

世更に之を惜しむ。君が筆を載せて、南の方ケープタウン、アルゼンチーヌに遊び、今茲に『南阿南米行』を公刊するに遇うて、明月重來の感を爲すもの獨り小生のみにあらずと存じ候。

君の文章は漢學の造詣ありて、飽まで世話に碎けたるものにして、其蒼龍窟當時より、已に蔚然、一家を爲して他人の企及すべからざる、而して模倣すべからざる格調を有し候。小生、君の文を讀まざるもの殆ど十年、今『南阿南米行』を繙くに、歲月と、閱歴は其塵土を拂拭して、神彩益々煥發するを覺え候。是れ所謂絢爛を去つて冲淡に赴くものか。

書中の意見、必しも相同じからざるも、君の著眼も亦面白しと云はざるべからず。而して小生の最も此書に感ずる所は、其筆端に現はれたる文章が、悉く文學的作爲にあらず、眞實、其瞬間に生じたる感興をありのまゝに傳ふる一事に御坐候。故に尋常一様、横濱より香港に至る、爛熟の旅行

談も、尖新にして快銳の趣を有し候。唯だ眞、故に新なりとは斯かる事をや申すならん。若し夫れ忽ちにして風景を語り、忽ちにして經濟を説き、忽ちにして風雲を談じ、忽ちにして兒女を傳ふるが如き、趣味横溢なるは、當今、君の才筆を除くの外、多く其人を見ざるべくと存じ候。

近時の教育、歴史にのみ重を置きて、地理を輕んずるがため、而して地理を語る好著述なきがために、邦人の知識徒らに上下に伸びて、縦横に迫り、新田義貞の系圖は知れども、南洋の地位すら知らぬもの少からず。小生は一世の少年が、『南阿南米行』の如き物を読み、其氣宇を濶大ならしめんことを希うて已む能はず、即ち隨讀隨感する處を記して、此くは報知仕り候。(明治四十四年八月五日)

水を斬れば水更に流る

東京の米價、二十圓近くに暴騰し、白米小賣相場は一等二十七圓八十錢にして、五等すらも二十四圓二十錢に上りたる一事は、驚駭すべき顯象にして、小賣相場は多く此に達したることあるも、定期米が二十圓に達したるは、今回を初めとする由に候。是れぞ所謂珠を炊ぎ、桂を薪とするものにして、細民の窮乏は申すも魯か、薄給の會社員、小官吏の困扼、想像に堪へず候。知らず、當局之に對して如何の考量を有するにや。まさかに商業道德の講釋にて、此困扼を救ひ得べしと信する程の氣樂にもあらざるべきか。

當局は過日、輸入外國米の關稅を輕減したりと雖も、其輕減率が最低に達せざるがため、且つ其時機の後れたるがため、燒石に水を注ぐほどの效能もなく、輕減が公表せられたる翌日、一層米價の昂騰したるが如きは、何たる始末に候や。レッセフェールの自由放任主義ならば、ドコ〜迄

も之にて押し通すも、また一政策たるを失はずと雖も、行政にて干渉することを試むる以上は、徹底の覺悟なくては却つて百害ありて一利なし。半上落下は萬弊の本に候。小生は此點に於て、當局が猛省する所あらんを希うて已む能はず候。元來、今日米價の暴騰は、買占手段が與かつて力あるは、申すまでもなければ、此手段をして有效ならしむる原因は、即ち米の製産高の寡小なる一事に候へば、宜しく此原因より除脱することを忘却してはならぬ筈に候處、當局も、民間も、此點に付きて論ずるものなきは慨歎の至に御坐候。例へば臺灣の米作は、目下、五百萬石より六百萬石にして、此中、母國に移入しつゝあるもの、二十五萬石より三十萬石に過ぎずと雖も、若し中央政府にして、臺灣總督府をして、積極政策を取らしめ、大に水理土工を起さんには、今日の收穫を倍加するは、決して困難にあらずとは、一般實務家の申す所に御坐候。今日の收穫を倍加したりとせば、

則ち其倍加したる、五六百萬石は、純然たる母國への移入米として利用し得べければ、西貢、東京より來る。輸入米も之にて防ぎ得べく、米價の投機的暴騰も之を防ぎ得べく、而して國家は年々六七千萬圓の正貨を海外に流失するの苦を免れ得べく候。

寶の持ち腐れと申す語は、あれども、我國家、肥沃なる植民地を有しながら之を利用する能はず、細民空しく窮苦し、國家空しく損失するほどの持ち腐れは、之あるまじきか。刀を擧げて水を斬れば、水更に流る。水を斬らんには、源を抑ふるの外なし。小生は當局が拔本塞源の工夫に想到せんことを希望して已む能はず候。(明治四十四年八月五日)

ゼームス・ムルドック氏の日本史

今春、議會の幹事室にて、尾崎行雄君と落合ひ候節、談、適ま日本に於け

る外人の事業に及び候ひしに、尾崎君、頻にゼームス・ムルドック氏の日本史を賞揚し、暇餘、一覽を求められ候。さりながら、小生は日本歴史に關する外國人の著作を信用せざる一人故、また例の如く糊と鉄とより製造したる、カイナゼのものなるべしと存じ、餘り氣に留めず候處、其後尾崎君、茲に其第一卷、第二卷を貸與せられ候。此くまで尾崎君の好意に接し候上は、一讀の義務あるべしと存じ、ヤット此夏期中に内容概見致候。讀了りたる小生は、案外の思を爲し候。其篤學、其考據、其親切、天晴なる著作にして、從來外國人の企てし日本歴史なるもの、到底、比較にならずと存じ候、第一卷は神代より足利氏に至り第二卷は葡萄牙との交通より、徳川氏を説きて、島原の亂に至り候。記事裁然として大勢を明かにするのみならず、其史料が外國側より取られたるものあるがため、從來の歴史家の忌憚し、若くは企てざりし點に於て、闡明する所少からず。此點に

於ては、獨り外國の讀者のみならず、また我公衆の一見すべきものと被存候。殊に數十葉の地圖は、親切丁寧に製作せられ候へば、側面燈として少からぬ光を與へ候。

小生著者を知らず、また著者の他の述作を知らず候へば、著者が歴史家として、孰れのスクールに屬するかを詳知する能はずと雖も、其著作の如何にも忠實に、如何にも眞面目に、凡ての材料は、必らず之を拂拭して用ひたる苦心は、筆墨の間に現はれ候。若し同著が、今一層哲學的ならざると今一層社會的生活を畫かざりしを憾む者あらば、著作とスクールとを異にするもの、註文ならん。要するに著者は日本人にあらず。而して其考據、其穿鑿、其拂拭、此の如し。外國人としては、最早や爲すべき凡てと、爲し得べき凡てとを爲したるものと稱するも、必しも溢美の言にはあらずるべしと存じ候。

聞く所によれば、著者は第一巻は自費を以て出版したるも、其費用の多きに堪へずして、第二巻は亞細亞協會より出版せしめたるものよし、小生は何卒第三巻が首尾よく出版せられて、此大述作の完製せられんことを切望して已む能はず候。(明治四十四年八月九日)

植人は百年の謀

根津嘉二郎氏が、慶應義塾に一萬圓を寄贈したる一事は、頗る有心の人を感動せしめ候。渠は是より先、已に早稲田大學に一萬圓を寄贈したるよしなれば、此寄贈が何れの學派に偏依したるにあらず、教育そのものに重きを置きたるものなること、察知し得べく候。一年の謀は米菜を植ゑ、十年の謀は樹を植ゑ、百年の謀は人を植うと申し候。根津氏、尖銳、敢爲、其事業界に於ける活動は、已に一代の耳目を聳動す。今や百年の謀に

就きて、思を用ふるに至りしを見ては、其滔々たる成金者流と、撰を異にする所以を見るべきか。(明治四十四年八月廿七日)

雲泥の差を見る可し

邦人、動もすれば歐米人を嘲りて、拜金者流となすものあり。彼等の拜金は即ち之あらん。併しながら黄金を崇拜して之を集め、而して後之を散じて友人を澤ほし、公事に盡くすの一事に至りては、また邦人の企て及ぶ能はざる所に御坐候。即ち米國の一寡婦が、此頃京都同志社に二十萬圓を寄贈して大學を起さしむるが如きことを以て、報徳とか、二宮とか云ふ美名の下に、私財を蓄積するの外、寸毫の公心なき邦人に比すれば、雲泥の差を見るべく候。(同日)

無黨と有黨との辯

世間は『無黨』と『有黨』との戦場にして、知識を有し、財産を有し、権力を有するものは、有黨たり。知識無く、財産無く、権力無きものは、無黨に御坐候。無黨は毎々黄金、財力を輕侮冷嘲するを習と致し候へ共、小生之に與みせず。何となれば黄金は其之を得んとしたるもの、智、若くは勇、若くは膽氣の結晶體にして、怯懦、遲鈍、安逸のまた得る處に無之候へば、黄金を有すると云ふことは、其人が大小高下を問はず、或るキャラクターを有するものなるを説明致し候處に御坐候。唯此智、勇、膽氣の結晶體は、土方も、馬丁も之を有するを得べし。併しながら之を得たる後、之に執著せず、尊貴なる事業に向つて、之を投すると否とによりて始めて其人物の高下清濁を卜する譯に御坐候。(同日)

憐むべしスノップの本色

世間、肉體を救はんがために、財を投ずるものあり。是れまた不可ならず。靈魂を救はんがために、財を投ずるものあり。是れ更に可なり。權門に近づき、勢家に入出し、あはよくば、爵位勳章を周旋せられんがために、財を投ずるものに至りては、スノップの本色にして、憐むべき痴漢と申すべきのみ。(同日)

羽左衛門無く梅幸無し

新内閣の世評甚だ悪しからざるが如く相見え候は、政友會員としてにあらず、國民の一人として小生の祝賀する處に御坐候。蓋し國民久しく、欺瞞、誦詐の政治に飽きたれば、眞面目なる政治を望むこと、大早の雲霓を

望むが如くにて、而して西園寺侯によりて組織せられたる新内閣は、其輪郭に於て、稍此望に副はんとするが故に御坐候。勿論政友會員より見れば今少しく政黨内閣の色彩の、ハッキリとするを望むならんと雖も、今日の勢、此位が關の山ならんかとも被存候。

然し右は一體の輪郭につきての説にて、少しく内容に立ち入らんには、或所には枯枝あり、或所には贅枝あり、尙多少の改竄を望ましき所なきにあらず。譬へば新内閣は農工政策なりとの事ありて、新民主會に結ばんと欲せば、農商務大臣の人選こそ、最も力を用ふべき所にして、此處をロイド・ジョージ流の新人物の出づる處ならんと豫期したるに、然らざりしものは如何なる理由にや。殊に外務大臣の人選、最も其當を得ずと存じ候。生硬、縹薄、唯だ省内の屬僚間にこそ都合よけれ、内外に都合よき人とは受取れず候。但し總理大臣、自から外交の樞軸を握り、外務大臣は唯だ祕

書官として之を用ふるに止まると申すならば、是もまた一策なるやも知るべからず候。

新内閣の閣僚は其一個人としての技倆より申せば、多くは相應の腕者にて、且つ其人品もまた具備せられて、前内閣の如く、探偵を政治と心得、株式を経綸と同一視するが如き者少なく、好しや世上の嫌疑を蒙るべき漢子ありとするも、統率者の人品、優に之を雪ぐの力あるは、此内閣の一長所なりと雖も、其年齢より申すに、四十七歳の外務大臣を除きては、皆六十歳に前後する老人なるは聊か心細く被存候。年齢は其人の心を制限せずとは申すもの、矢張り年齢は政治上の要素にて、歐洲列強は皆、四十年前後の閣臣多き所以深く鑑みるべき處と存じ候。故に劇道に譬へんに、此内閣には松助あり、八百藏あり、否な團藏すらあり、其業は勝れたりとは云へども、羽左衛門なく、梅幸なく候へば、人氣を集むる一點に於て、如

何あるべきかと被案候。蓋し租税の多少を論ずる納税者のみが、政治の對手にあらず、議論感情を重ずる階級あるが故に御坐候。

乍併、孰れの内閣か短長なからん。此上はまづ閣僚一致して、黨員と意志を通じ、天下の望を空うせざる政策を行ふこそ、肝要に御坐候。若しそれ其政策に至つては、追つて卑見を開陳可仕候。(明治四十四年九月一日)

小松原氏滑稽突梯の傑作

小松原前文部大臣は、風采容貌より見れば、極めて眞面目らしく思はるれども、其行事の跡につきて之を見れば、頗る滑稽趣味に富みたるが如く思はるゝ節も少からず候、由來邦人、殆ど全く滑稽趣味を缺くかと思はるほど輕滑調に乏しき折なれば、小松原氏の如きまた是れ文壇の珍異として之を保有するの必要あるべきか。

小松原氏の諧謔なるや、假名遣問題にも、高商事件にも學生の數と教師の數と相等しき商科を大學中に設けしが如き、南北朝問題に狼狽轉倒したるが如き、一々、枚舉するに暇あらず候へ共、其最大傑作は一昨日の官報にて發布したる作法教授事項ならんか。右は兼ねて小松原氏より任命したる委員が相集つて全國の師範學校、中學校に於て學生に課すべき學科として制作したるものを、文部大臣之を可として公表したるものにして、運筆は多く委員の手に成りたれども、落款は全く小松原氏のものにして、傑作にせよ、悪作にせよ、責任は、全く小松原氏の雙肩にあるものに御坐候。

右の作法教授事項なるものは、六號文字にて、官報の七ページを埋むるものにして、居常の心得、姿勢、進退、起坐より、椅子に就くとき、離るる時、行幸の敬禮、室内の敬禮、洋食の食べ方、贈答、家例等に至るまで一切の人事を通じて、行儀作法を並べたるものにして、中には『直立姿勢は

兩足の踵を接し、足尖を凡そ六十度に開き、上體を眞直に持ち、下腹部に稍々力を入るゝやうにし、兩手は自然に垂れ、口を閉ぢ、目は前方を正視すべし『洋服の禮服は、無地の黒絨にて、ネクタイは、麻地白の蝶形、若くは一字結等』の妙文字あり。昨日小生、交詢社に立寄りたる處、一紳士今の文字を読み上ることに、笑聲、堂を動かし候、行儀作法などは、人生に必要事には相違なけれ共、是は家庭と社會が、自然に教ふるものにて、學校が殊更に細目など作りて教ふるまでもなく、假令之を教ふるも教師の知る處を教ふれば可なり。然るに文部大臣、則ち此處まで立ち入りて、國家文教の權を家庭にまで及ぼさんとす。如何に世話好きの家長政府とて、是は餘りに立入り過ぎたる事には無之や。新任文部大臣、宜しく一息に此の如きものを吹き飛ばして可なりと存候。(明治四十四年九月二日)

顧みて他を言はしむるが爲ならん哉

陸海軍に關しては、批正すべく、改善すべき事多く候へば、軍人にして此に氣附きたる處あらんには、國民の前に其意見を公表するを怠るべからずとは小生がベレスフォード卿の議論を引き、論じたる處に御坐候。然るに其後久しからずして、太田海軍大佐の海軍改革意見なるもの、公表せられ候に付いては、空谷足音の感禁すべからざるもの有之候。勿論、小生は太田大佐の意見を、新聞紙上にて見たるのみにて、親しく語り合ふたる譯にあらず、従つて其論、語つて審みならず。また其結論も、或るものには同意なれども、或る點には首を傾ぐる所有之候へ共、兎に角、其敢言の勇と、愛國の誠とは、確に領承被致候。

海軍既に太田大佐を出したるも、陸軍未だ一人、其意見を公表するもの

なきは、果して何故にや。小生の私かに深く惑ふ所に御坐候。然らば則ち我陸軍は完全にして、寸毫の改善を加ふべき點なきかと云ふに、必しも然らざるべしと被存候は、酒間、私席、今日の陸軍行政を非難するもの、少からざるに徴して明白に御坐候。然かも年少の佐尉官、血氣に任せて放言するにあらず、然るべき年輩にして、然るべき地位に在るものが、然るべき場合に、論ずるもの一人に止らざるを見るも、陸軍の批正すべきは、海軍に比して、更に大なるものあるを察知し得べく候。

然らば則ち、何故に海軍に太田大佐を出して、陸軍に之なきか。小生は私かに我陸軍の爲に、之を悲しみて已む能はず候。凡そ今日我陸軍の勢力が、全社會に廣轉して、陸軍長老の歡心を失したるものが、社會に肩身の狭きを感じるの痛苦は、小生固より之を察せざるにあらず、然ども陸軍軍人は、軍人たるに先ちて忠良なる陛下の臣民たることを忘却すべからず。

陸軍を愛するは、然るべきことながら、國家は陸軍に比して、更に重且つ大なるを忘却すべからず。念頭、苟も此事を思ひ浮べんには、大丈夫の雄心、豈に敢言進論を怠るべけんや。

且つ陸海軍は、陸海軍人の陸海軍にはあらずして、國民の陸海軍たり。而して陸海軍人なる者、また軍服を著けたる自由人民に御坐候へば、國民の愛育と、思慕の情とを以て圍繞せられざる陸海軍は、物の役に立つべくもあらず。然れば其缺點を批正し、其弊患を改善し、國民をして、其實情を領解せしむるは、即ち其根據を固くする所以なれば、陸軍を愛すること深ければ深きほど、之を批評するの已むを得ざるを感ずる譯に御坐候。是れ英國にありては、ベレスフォード卿が、海軍を批評し、ロバート卿が陸軍を批評して、已まざる所以に候。然るに我國、一人起つてロバート卿たらんとするものなきは、果して陸軍の名譽なりや、恥辱なりや。國家數十

年來、重祿、深恩を以て、士を養ふ所以、豈に彼等をして言ふべき所に、顧みて他を言はしむるが爲ならんや。是れ愛國の誠あるもの、深省すべき所に御坐候。(明治四十四年九月二十九日)

トロアの森林生活

過日、小島耕一郎氏より、共和譯せるトロアの森林生活を惠送せられ候處、昨日少閒あり、翻譯の機會を得、久しぶりにて一服の清涼劑を用ひたる心地致し候。トロアの思想、言語、世已に定説あり、更めて申すまでもなし、小島學士の譯文、平明にして清淡、また能く原著者の思想感情を彷彿せしめたるが如し、如今、『兎に角成功』、『黄金萬能』、『虛榮街揚』の僞福音書のため、出版界を蹂躪せらるゝ時代に於て、此の如き善書の刊行せらるゝは、刊行せらるゝのみにても、祝著の至に存候。案するにトロア等の

思想は現今の文明なるものが、餘りに極端なる虚榮に走るを見、横流の極、何の處に達すべきかを計り知るべからざるに激して、之に反抗せんとせるより起りたるものにして、一種の反動思想と目すべき點あれども、現今の文明が、絢爛、實熟する結果は、また更らに清素、單純に復歸すべきを豫想すれば、文明極致の理想と目すべき點も有之候。其反動思想あり、進歩的理想たるを問はず、何れの時代に於ても、何れの社會に於ても、必ず其一角より叫破せられざるべからざる思想に御坐候。

トロー曰く、『兎と、鷓鴣と、栗鼠と、人類とは相離るべからず、此もの相離れたる時は、即ち社會の不健全なる時なり』と。案するに、此思想と感情とは、古來英雄豪傑の腦中、必ず之あり。濟世の念、猛然として火の如くなるものは、其胸中、冷然として世を出でんとするの念、水の如くなるものに御坐候。蓋し英雄豪傑は、其智力上の地位、極めて崇高にして、他

人の爲に同伴するを許可せざるが故に、萬仞の高岳に孤行するが如く、心中常に凄凉の感あるを免れず。之れ其常に人世を厭うて、寧ろ小林を愛するの所以にして、昔曹操が己の志を述べて、春夏、讀書、秋冬、射獵を理想としたるに、過つて帝王の業を始めたりと申したるもの、決して英雄、世を欺くものには無之候。森林生活の思想たる、決してトローの發明にもあらず、また泰西に起りたる感情にもあらずと雖も、小生がトローに敬服する所は、彼が豪宕街揚の生活を知らずして、其素純を守りたるにあらず、十分に之を知りて、而して素純生活を創造したると、而して其思想に忠實に、思ふ所は即ち之を實行したる一事にありとす。思ふに之を言ふもの、何ぞ人に限らん、然れども之を實行するものありて、其言、極めて崇高に義理に富むを覺ゆるもの、即ちトローの書の讀まる、所以か。

『英雄回首即神仙』と申候。我政治社會、實業社會、英雄其人に乏し

からず、小生は彼等が此書を読み、少しく首を回らさんことを希うて已む能はず候。(明治四十四年九月三十日)

湯ヶ原にて

此頃、静岡縣の一青年より、靈岳と題したる小雑誌を贈り來るに會うて試みに之を読み行く中に、數ば松本君平君の名字を見受け候に付き、少しく興味を以て讀み了れば、則ち此の小雑誌は松本君を中心としたる半修身半宗教團の機關新聞たるを解し候。後、此事を以て松本君に語り候處、君袖中より一冊子を出して、余の宗教神人觀は此中にあり。我郷の同志、千百人、皆切磋琢磨して、以て德に進まんことを勉め、今や一個の精神的運動となりつゝありと申され候。

小生湯ヶ原に來りて、閒暇に任せて、右の小冊子を翻讀致候處、文章は

漢文崩しにて、淮南子や、列子にありさうなる文字多く、君が平生の文章に似ず。而して書中の意見、儒にあらず、佛にあらず、基督教にあらず、一端より評すれば、汎神教の如くにも見え、他の一端より評すれば、獨人ヘツケルのモンズムの如くにも見え候。君の説によれば、人々靈命あり、此靈命は、即ち萬想萬行の本源にして、禽獸、蟲魚、草木、砂石もまた之あり。而して人と禽獸、蟲魚、砂石との總量なる宇宙にも、また靈命あり此靈命を互に完成すること、即ち宇宙、萬有の目的なりとのことに御坐候。此點に於ては佛氏の山川草木悉皆成佛と、宇宙品類の總體、即ち神明なりと云ふヘツケル説とも相互の様にも思はれ候。但だ其進取不已、剛性の德を教ふること、奮闘を教ふることなど、何れの邊にか、劍光の下、極樂ありと教ふるマホメットの熱烈なる所あるは、最も注目すべき所に御坐候。

但し宗教観は人類ありて、以來の事にして、三大宗教すら、直に相交錯する所ありと云はるゝ程に候へば、松本君の宗教論が、孰れかの宗教と相互に所以あるは怪しむに足らず。但此書に於て小生最も深く感ずる所は、松本君が世の宗教を論ずるものゝ如く、他人の宗教論を論ずるにあらずして、確然として信じ、巍然として動かす、自から其の握把したる所を述ぶるがため、一道の眞氣、其の間に周流するの一事に御坐候。今より三年前君が静岡市に於て、日糖事件の元兇と選挙を争ふや、静岡の青年殆ど皆君を助け、其の演説會場に臨むや、英雄の如くに歓迎せられ、最後まで君を支持したる小生自身までも、思はず破顔したる位にして、何人も、其の當選を疑ふものなきほどに候ひしが、開票の結果は、却つて日糖氏の勝利となり申候。此に於てか君、乃ち慨然として支那に赴きて爲す所あらんとし、北京に赴きしが、病を得て歸り、床上にありとの一事、小生大學病院

に於て腹部を切開するの日は、即ち永遠の訣別ならんことを思うて、暗涙を飲みて分手したるほどに候。君が床上に仰臥したるも、數ば死生の問題に艱み、一旦闊然として、悟入する所ありしもの、即ち此靈命觀に候。思ふに君の宗教觀には或は見る所を異にするものあらん。然しながら兎に角に、其眞摯なる信仰は何人にも領受せらるべきは、小生の信じて疑はざる所に御坐候。(明治四十四年十月二十九日)

秦を亡ぼす者は楚ならん

小生、前月の初、上海に入り淹留一月、兩三日前歸朝仕り候。支那に關しては、年來議論なきにあらざりしも、今回は石盤を拂拭して、新たに石筆を以て書き下ろすが如く、心を虚うして觀察せんと試み候。古人の『胸中、定見なかるべからず。また決して成見あるべからず』とは、小生此際

の用意に御坐候、右の次第故また勉めて支那人と交ることを致し候。是れ同胞の手を経て来る報道のみにては『知識の古手』のみにて、動もすれば他人の偏癖に致さるゝの憂あるが故に御坐候。

偕斯くて觀察したる所にては、大江の南北、革命共和の氣勢、充滿して區々、北朝の兵力を以て之を夷平せんなどは、精衛が海を埋めんとするの企てにて、到底望なきことと被存候。武昌或は落つべく、南京或は取るべし。さりながら南方民心の中に城かれたる武昌南京は、決して陥落し得べきにあらず。古、楚、三戸と雖も、秦を亡ぼすものは、必らず楚ならんと申し候。況や、江南一帯、悉く楚なるに於てをや。

世人、往々、革命の事不可ならず、革命の成功また信すべし、さりながら、盛名天下を掩ふ大人物の出でて之を統一するにあらずんば、其業或は遂げ難からんと申すもの有之候へ共、是れ官爵、閱歴の桎梏を脱する能は

ざる日本人の見解のみ。支那人は、草澤、英雄起りて、戎衣、天下を取りたる事は數々遭遇したれば、一介の書生と雖も、大相撲に勝てば、則ちそを認めて大關とするに、些の躊躇なく、孫逸仙、黃興、黎元洪の名は、殆ど半神的に傳誦せられ、曾て軍機にありしとか、總督たりしとか、申す人の盛名は全然蝕し去られ候。況して北京に於て過て雄材の名を得たる巧官の如きは、時人之を見ること、枯葉の如くに過ぎず候。

卑見によれば、共和政府は成立するも、當分は武斷共和たるを免れざるべく、秩序立ち、兵氏の別正しく、各州の議會、立法權を回復したる後、始めて純粹の共和政治に至るべきか。世人、或は支那人は共和政治に適せずなどと申す人ある由なれども、一通りの文化に達したる以上は、或る政體が或る人種に適せずとか、何かと申すことは、村學究の迷信に外ならずと存し候。黄色人は立憲政治に適せずとて、我立憲政治の嗤笑せられたる

は、僅かに三十年前にありしを回顧せば、何ぞ支那人の共和政體を危むを要せんや。唯だ大亂の後、節制弛緩したる所少からざれば、多少の騷動は免れざるべしと雖も、小生は、共和政府が、能く物情を鎮靜して、以て新支那を起すの力あるを信じて疑はず候。

此行、純粹に政治のみを目的と致し候事ゆゑ、烟霞の慾、充たすに由なく、僅に南京の莫愁湖を見て、虞家少女の往時を追憶したるのみに御坐候。莫愁湖行は、僅かの時間に候へ共、雪天にて、榆樹、楊柳の間、寒驢の往來するなど、江南煙雨の景、遺憾なく賞鑑せられ候、是は追々可得貴意候。(明治四十五年一月六日) (以上日本新聞所載)

以呂波にては間に合ひ兼ね候

今朝の新聞紙を一見致候處、文部大臣は、愈々小學校の義務教育を延長

して、六年とする事に決意し、之を以て議會の協賛を得んと欲する由、頗る卑見に合したるものなれば、小生は雙手を舉げて賛成し、必ず今年の議會にて通過せしめたくものと存じ候。今日の小學四年教育にては、普通の國民として差支なきだけの讀書算術の出来るか出来ぬかは、小生等の机上論よりは、子弟を有する地方諸君の方、却つて親しく承知せらるゝ事と存候。況んや世間の事情も、追々複雑に相成り候へば、加減乗除といふのは、みにては、間に合ひ兼ねる場合、日々相生じ可申候。義務教育六年計畫は、即今よりの義務と存じ候、但し之と共に中學の課程をも、今少しく高尚にし、高等普通教育として恥しからぬものに致したしと存じ候。斯く論及すれば學校聯絡、學制組織の問題にも可相成候へども、小生は差し向き、小學教育の年限延長より斷行致したしと存じ候。(明治四十年一月六日)

託して太平洋の海波にあり

小生は都新聞の評論を愛讀致し居候、其評論の卑見と合せざる時にても、其調子を好み候。昨今、頻りに日本が太平洋の主人たらざるべからざる事を論じ候は、小生の宿論に合して大に満足致候。但し日本が満洲に於て現今の責任を取り候上は、最早や退引ならぬ場合に相成候事だけは認めざるべからず候へ共、日本將來の運命は、託して太平洋の海波にあるの一事は、同感に御坐候。愚見によれば、我國民は後來、南米、中米に大移轉を試みて、新故郷を太平洋の彼方に興さるべからず。また興さんとするものなりと信じ候。然せんには、太平洋は新故郷と舊故郷との間に挟まれたる一大湖沼となるべく候。已に湖沼たる上は、婦人小兒も戯れに棹さし得べく候。何卒バイカル以東侵略などと申す大豪傑漢も、少しく眞面目に

なつて此邊の事をも商量せんことを祈り候。(同日)

追罰をも加へざる可らず

濛氣陰々の東京も、今朝は陽氣焔々の好天氣と相成り、小禽は梢より梢に轉じ、鳩は遠林より群を爲して、畑地に下るなんと、春は已に樹梢より郊野に來り候。出社の途上、日比谷の公園を通過致し候に、梅の南枝は已に綻びたるもの相見え候。間違澤山の世上に、曆本の約束のみ寸分の間違ひなきは、聊か以て慰むるに足らん歟。

本日二三の新聞紙に、歴史上の人となりし探險家に、贈位を奏請せんことを、政府に要求せんと欲する人々有之様被見受候。小生は探險家の文勳が、攻城展土の武勳に比して、些の軒輕なきを信する一點に於ては、世人と同感にして、或は最も熱心の一人かと自信致し居り候。然れども古人は必ず

しも今日の贈位を期して、萬里を踏みたるものに無之、此國を愛し、斯道に忠にして、汲々として老の至るを知らざりし處、大に感嘆すべし。其高尚なる所以は、官位秩祿の臭氣なきにありと存じ候。然るに今其流を汲む人が、強て之に官階を贈らんとするは、却て古人を褒すものにあらざるかと被思候。且つ朝廷の官位は、現在の國家が、現在の臣民を褒賞する所以に有之候に、之によりて、一々、古人を褒賞せんとせば、宮内大臣は多忙なる歴史家をも兼職せざるべからざる事とも可相成候。已に某々氏の探險の功を褒賞せんには、柿本人丸の文勳をも褒賞せざるべからず、更に追論せば、高師直の悪虐をも追罰せざるべからざることと可相成候。事此に至りては宮内大臣は、侍従の臣と、歴史家の外、更に滑稽作家をも兼ねざるべからざるに至らんと被存候。古人を追懷せしめんには世自ら其道あるべし、何卒官臭は善き加減に打止めたきものに御坐候。(明治四十年一月七日)

骨董賞翫其弊二あり

敬啓、過日、骨董を愛翫する某縉紳に面晤致し候處、近年東京に於て骨董の鑑賞せらるゝの風、甚だ盛なるが爲に、名器、珍翫、一たび其の原所有者の手を放れたる後は、直に他人の手に入り、決して市に出づることなしと云ふ程の由に候。右の如く骨董愛翫の風盛なる譯は、純然たる崇古慕昔の人心より出でしものにあるべけれども、半ば流行にて、婦女子が衣服の多きに誇ると同じく、唯だ譯もなく骨董の多きに誇らんとするがためなるべしと申すことにて、此流行を助長するには、二三十年崛起したる新民の力、興りて多きよしに候。是れ彼等が多く寒門より出で、家に奇翫を以て人に誇るべきものなきが爲に、相率ゐて骨董を市に得んと欲するが爲なりとの事に候。

愚見によれば、骨董蒐集の風たる、蓄妾の風に比して優ること數等なりと雖も、富貴なる一階級、及び少年の模倣すべき事には無之候。是れ第一に、骨董は人をして老しむるがために候。小生は其何故なるを明言し得ず候へ共、兎に角人をして角巾羽扇境の人たらしめずんば已まざるの力ありと被信候。是れ或は其放つ古氣陳氣が森々として人に迫るが爲か。第二には骨董を愛する人は、風流高尚なるが如くして、其人、極めて卑劣となるの恐あるが故に候。大抵、骨董を翫ぶもの、掘り出しものを欲せざるはなく、之によりて、初めて其眼識の鋭尖なるを證せんがため往々にして千金の奇翫を裏長屋の骨董店より發掘し、僅か數十金を以て之を買ひ得たるを誇稱するの風あり。夫れ千金の價あるものは、千金を投じて買ひ得てこそ、自から慰むべけれ、數金を以て買ふに至りては、是れ殆ど欺瞞の行爲にて、自ら慰むる所以にはあらず、少なくとも士君子の誇説すべき所業には無之

候。然るに貴紳にして、往々かゝる事を誇説するもの不少を見ても、骨董が如何に人の品性を傷ふかをトし得べく候。但し骨董が富貴の人には必しも不可ならざる所以は、其の黄金に代はるがために候。笠翁の説に、『骨董は長房縮地の一術にして丈を斂めて尺となし、尺を斂めて寸となす、銀を藏ふるは金を藏ふるに如かず、金を藏ふるは球を藏ふるに如かず』と申し候如く、骨董に至りては、一幅一益、黄金に勝る數倍のもの有之候へば、更へて以て藏ふるも、聊か自から安心の方なるべしとも被存候へば也。但し此れにも、餘り熱中すれば、舜の用ひたる椀と、堯の用ひたる箸とを買ひ得たるを誇りし富人が、遂に舜椀堯箸を以て、食を道に乞はざるべからざるに至りし諺を實現するの憂なしとも不被申候。若しそれ眞に古人の技工を崇尚して、古物を集むるもの、如きは、其事固より高尚にして非難すべきなく、自家に眼識なきも唯だ井上伯や、同好の長老に阿らんが爲に、骨董通

らしき顔色をつくるものに至りては、沙汰の限りにして批評の外にありと御承知被下度候。(明治四十年一月三十日)

是れ新聞のみ、出来事にあらず

敬啓、本日の新聞紙によりて、大隈伯が進歩黨の首領を辭任せることを承知せられたるならんと存じ候。同伯は其の演説に於て當今の國勢を以て容易ならずとし、數年の後は非常の窮厄あるべしとの説を開陳せるより見れば、加餐自重、其の在野黨の首領たる責任を盡くさんこと、最も國家に取りて忠誠なるべしと可被信候に、見すく退任すると云ふ次第なれば、突然、此演説によりて、伯の進退を承知せられし人々に取りては、殆ど解すべからざる事にも可被思候。但し小生は同伯の退隱に對しては、十分の惋惜あり、同伯の過去に對しては、十分の嘆美あり、同伯の心事に對して

は、十分の同情あるに係らず、其の退老を以て其の晩節を全うするに於て、最も時を得たるものと信じ候。小生の了解する處に依れば、同伯の退去は今日に起りたる問題にはあらず、三四年前同伯左右親近の人々より、其の終焉の地として、一樞密を得んことを、時の勢力家迄申出で、稍々成案となりしも、某老の斷乎として反對したるがため、其の儘に相成り候もの、如し。其の後、昨年の議會に於て、政府が鐵道國有案を提出したる時、黨員は之を以て戦後の經營に取りて已むべからざるものとしたるに係らず、同伯が獨見の斷にて、反對の旗幟を掲げ、黨員をして、不承々に背水の地に立たしめたる頃より、改革派は最早や伯を以て其首領と仰ぐの時にあらずと爲し、其の決心を固めたるもの、やうに候。其の黨員も其の心中の乖背すること此の如くなれば、首領として止まるも、是より益々其の困頓窮厄を重ねるに過ぎざるべければ、今日を以て退老せんこと、最も時を得

たりと可申候。但し其退老と云はずして、辭任と號し、政治を以て生命となし、決して進歩黨を去らずと云ひ、以て再現を諷示するも、廉頗が趙王の使に對して巨椀の飯を食ひ、強弓を張つて以て、猶餘勇あるを示すの類に外ならざるべきか。

偕て大隈伯なき進歩黨は、今後如何なる境遇に立つべきかと申すに、小生は別段從來よりも政界に輕んぜらるべしとも不被思候。昔シタルレーランは奈翁の死を聞き、冷然として是れ新聞のみ、出來事にあらずと申候。是れ奈翁の存亡を以て列國の形勢を變ずるに足らざるを意味し候。小生も大隈伯の退老に對しては、同じく一の新聞にして、出來事にはあらずと申すを憚らず候。何となれば同伯の羈絆を脱すること、蛇の絹を脱するが如くすべき時期に達し候へば也。若し夫れ後任としては、自然の勢、大石氏出でて同伯のマントルを著くるに至るべきは、小生の曾て勸告したるが如

くに候。大石君、機略あり、見識あり、辯才あり、加ふるに其の步趨の妨となりし重荷を下したる以上は、其の進退の輕俊敢爲なる、目ざましきものあるべしと信じ候。大隈伯なくして、進歩黨見るに堪へざらんと云ふが如きは、新人は舊人に如かずとする政治的迷信家の説に過ぎざるべし。小生は凡てに於て樂天家にして、凡てに於て新時代の謳歌者なるが故に、進歩黨の一轉化を祝賀致し候。(明治四十年一月二日)

目的は交權にあり

敬啓、本日の新聞紙を見れば、伏見宮殿下は愈々渡歐の途に上られ候由。小生差支ありて送別の列に伍する能はず候へば、紙上にて遙かに祝辭申上候。一行中に山本大將などの姓名相見え候ため、中には政治上の重要な意義を有するかの如く、想像するものなきにあらざるが、全く朝廷の交權

にして、政府の交渉にはあらず。此中、何等政治上の意義なきは明白に御坐候。若し政治上に重要な事ありとせば、我大使小村男の倫敦に在るあり、態々山本氏を煩はすまでも無之候。是は公衆の等しく諒知すべき事と存候。偕て政治上の意義なきは右の如くに候が、此行社會的に日英を接近せしむること、頗る深からんことは、小生の期待し且つ希望する所に御坐候。日英同盟は、締約以來已に七年にして、其の間には日露戦争の試練もありて、歴史的の意義すら生じ候へども、固と政治上の便宜より出でたる同盟にして、兩國人民の社交的交権は英佛、若くは英米の間の如くなる能はず。殊に歐洲列國の間は其の政治に於ては相敵視するも、皇室に於ては互に血液の交換あるもの少からず候へば、事あるの時往々にして此血液によりて情意を疏通することなきにあらず。然るに我國は絶東に偏在するがため、皇室の通婚もなく、人民の交権も少なく、従つて社會上には全然孤立の有

様に御坐候。然れば此行兩國皇室の権情を厚うし、併せて日英人民の間を接近せしむるを得候はんには、兩國は益々同盟を培育するの效少からざるべしと存じ候。一言にして申せば、政治上の同盟に重ぬるに、社交上の同盟を以てすること、此行の目的ならんか。小生は殿下の高貴なる品性と、隨員の才幹とによりて、此目的を遂げられんことを期待し、雲海萬里、恙なからんことを祈り申候。(明治四十年二月十三日)

長安奕碁の如し

敬啓、朝に萬金を得、暮に萬金を得、ミリヲネーアを産出するは、恰も雨後の春草を生ずるよりも安しと思はしめ候株式市場も、昨今は秋官肅殺の運に向ひ候にや、從來得意の人、多く失敗し、有名なる二三子の如きは、全然滅亡に近づき候よしに御坐候。聞く處に依れば此類の人少からざ

るのみならず、近時權利株の價格の騰貴に伴うて、貧寒洗ふが如き身上より、四五萬乃至二三十萬の富人となりし人々も、權利株の價格地に落ちたるが爲め、元の木阿彌となり、生なかに一時の榮華を経たるを悔ゆるもの不少との事に御坐候。昔支那の詩人は、朝に革命あり、暮に代朝あり、王子公孫一朝にして民家の子となるを嘆じて『長安如奕碁』と申候が、昨今の株式社會は丸で奕碁の如くにて、政治家にして此方面に手を出し候ものも、徒らに汚名を贏し得たるのみにて、實質に於て何の得る處なく、始めて急がば回れと申す諺の大に眞理あるを覺りし人不少様に御坐候。小生が數週前、驟分限に對して開陳したる所、案外に早く效驗ありしは驚嘆すべき次第に御坐候。但し此にて株式界が一蹶して、最早振はざるべしと思はゞ大早計に御坐候。一派の驟分限の滅亡したる後は、形勢再振すべしとは、經驗ある實業家の齊しく申す所に御坐候へば、二月の陽春と共に、株式社會に

春風の吹くを見るべきかとも被思候。但し株式社會に於て、風吹かば吹け雨降らば降れ、我國運は隆々として進みて已まず、實際に於て見込ある事業は、一向に頓著なく企畫せられ、平々坦々の間に進行致し候間、國民は安心して其の事業に勉めて可然と存し候。(明治四十年二月二十五日)

田園生活に在る人に送る

敬啓、兩三日來、東京の天候不定にて一陰一陽、人をして悶々たらしめ候處、今日は睡眠より目覺め候や、朝暾煌々として窓外より侵襲し來り、人をした春眠を貪るの暇なからしめ候。西疇是より多事なるべく、徐ろに老兄の田園生活が羨ましく相成り候。僕の如き、東京に於ては寧ろ田園黨にして、恬淡寂寞の生活を爲す、新保守黨の一人に有之候へども、政府のある處、豪族のある所、新聞紙のある處、四圍の空氣、自から附炎、隨熱

躁進の燥氣に充滿致し候へば、此間にありて獨り詩人らしき生活を送らんとするも、逆も六ヶしく御坐候。されば宿昔の願は、皇天若し許さば、田園の間に晴耕雨讀して、一大著述を致したしとの一事に有之候。斯く申すも、決して街つて風流がらんと欲するには無之、老兄、同被、同翔の昔日を懷往せられ候は、此言の僞らざるを領せらるゝならん。僕の如き不肖と雖も、また少しく進退の義を解し候。進むに其の道を以てせば、進むもまた可、退くに其の道を以てせば、退くもまた可。されば進退は問題にあらず、其の心術如何を問ふべきのみ。顯榮を鄙みて、退藏を偉とするが如きは支那流の類似道徳にして、取るに足らざるものなること、小生の宿論に候へば、必しも之に擬せんと欲するには無之候。唯だ濟世の志あるものは、また世に出づるの思ひなかるべからずとは、小生の宿論に御坐候。濟世の志あるものは、世に執著し拘泥し、一轉して俗化致し候。若し一點出世の思

あらば、従つて邁往不屑の韻を生ずるが故に御坐候。今日の小生は依然として昔日の如く、些の變化なし。幸に御安意願上候。昨今の事、凡て小説の様に御坐候。新聞紙も多くは虚説の傳播機關たるもの有之候。此間の事區々寸楮尺幅の盡くす所にあらず、一度御上京を煩はしたく、萬縷、期三拜鳳一候。曾て分手の時は、天邊の明月常照の理なきを歎じ候も、漸く世上の春風重來の望あるを知りたしと存じ候。(明治四十年三月十七日)

風流壇上の一罪

敬啓、小生數日前一親朋に招かれ候處、飲食の美は申す迄もなく、卓上數輪の蘭花あり、天地開くとも見ゆる薔薇花の直徑二寸五分餘のものを、惜し氣もなく切花としたるあり。聊か野趣なれども、沈丁花の紅白の交も活られたるあり。之に副ふるに海棠の妖艶なるを以てせられ候。小生は之

によりて主人の心盡し如何にも殊勝なるを見、其の趣味風流をトし得て、大に満足致し候。近時歐洲の風に模して人を招くもの不少候へども、往々飲食のみに留心して、花卉に著目するを怠るものなきにあらず。甚しきは作花にて一時を濟ますものあるに至りては、決して容しがたき風流壇上の一罪と存じ候。燕宴は胃の腑を充塞するのみが主眼にては無之、閒談、花卉、飲食によりて心身の凡てを樂しましむるが目的に候。然るに主人は唯だ飲食の類多きをのみ競ひ、客もまた主人の心盡しを味ふよりも、肉菜の多寡可否のみを論ずるが如きこと少からざるは、畢竟、我國民が花卉に對する趣味の未だ足らざるが故には無之やと被存候。其の原因は多々あるべしと存じ候へども、草木文學の發達せざるも一原因ならんか。譬へば支那に於ては、昔少女ありて原上に友を待ちしに、約を違へて到らざりしを以て、其の薄恩を怨みて涕泣し、涙地に落ちしが、其の涙痕より生じたるも

の秋海棠なりとして、之を斷腸花と名づくとの傳説有之候がため、尋常一樣手水鉢の傍にある秋海棠も、かゝる聯想より、一種の詩趣を生じ候。之に反して我國にては山吹の太田道灌、梅花の紀貫之の女に於けるが如き位の所にて、草木花卉に關する小説文學に貧寒なるは、頗る社交の風流を滅殺する譯に候へば、過日も申し候如く、歐西、支那、日本を通じたる草木花卉文學の起らんこと、深く願はしく存じ候。昨夜二三友人と會し候時、天若し我一萬餘坪の土地を與へんには、甘じて賣花爺となりて、自動車によりて東京市中に花卉を供給せん、それには三四人の賣花爺なくては十分ならざるべし。仔細は東京にては一組の外賓ある毎に、期節の花は悉く賣れ切れ、一輪をも止めざるほどなるが故なりと申し候。何は兎もあれ、東方の花彩國の花の都にて、櫻花、梅花の期節の外、殆ど花を見る能はざるが如き荒涼なる状態は、速かに改良致したしと存じ候。(明治四十年三月三十日)

講演會の料金徴收は興學の端

敬啓、通俗學術講演會は、一種のユニバーシティー、エキステンションに御坐候。同會が一圓の入場料を徴したるにも係らず、多數の聴衆を集め得たる一事は、頗る人意を強く致し候。小生は之を初として、學術、政治、文學の講演には、一切料金を徴收する様に致し度候。元來學者先生と申しても、衣食の料なくして生活し得べき者にあらざるに、學者先生を招きて講演するや。唯だ一言の挨拶、一本の禮狀にて追ひ拂ひ候は、極めて苛酷の事にて、學問智慧を尊重する所以にあらすと存じ候。現に學者先生が新聞雜誌の依頼に應じて論文を起草し、若くは學校の課程を受持つや、相當の報酬を受くるを例とするに、講演のみ報酬なしとは、辻褃の合はぬ話に御坐候。昔、井上金蛾が賣講なるものを江戸に企て、禮金を徴して講義を公

開致し候以來、江戸に於ける學問普及の端を開きて、官學の勢之より衰ふるに至り候へば、儒者に於ても、講演料を徴するを認めたる譯に候。英米の如きは固より然り、コンコルトの哲人、エマーソンの如きも、其の實また賣講によりて、一半の生活を立てし譯に御坐候。今日の如く講演會は無料にて人を招き、學者文人が無料にて講演する結果は、其の講演往々にして蕪雜、無責任に流れ、唯だ名を掲げ、口を開くを以て責を塞がんとするもの不少候。斯の如くして學問思想の尊貴を保たんとするも、容易ならざる次第に御坐候。故に小生は、今後講演は成るべく料金を徴し、講演者に對しても一回三四百圓より六七百圓の報酬を呈することに致したく候、此の如くして、始めて大演説も大講演も生じ可申候へば、切に文學學問の爲め望む所に御坐候。(明治四十年四月一日)

破格の恩典は聖代卓越の所以

敬啓、過日全國新聞記者大會の折柄、破格の恩典により、一同、濱の離宮を観ることを許され、次に新宿の御苑にて茶菓の饗應を賜はり、更に振天府の戦利品を展覧せしめられ候は、如何にも難有思召にて、小生は之を傳聞して、深く皇上の洪慈に感激し、淪肌浹髓の思ひを爲し候。右に就き一二新聞には、深く天恩に感泣すと申す文字も相見え候へども、泣の一字は少しく文人形容の語かと被存候間、昨夜、地方新聞にある一舊友來訪致し候とき、談、右の事に及び候處、感泣は文字通りのよし承知致し候て大いに感動致し候。友人の申し候に、拙者は元來、政黨が大嫌にて、西園寺侯が政黨の首領たることも好まず、西園寺内閣の内治外交も不賛成の事不尠候へども、侯の執政となりて以來、人民をして宮廷に近づかしめんとする

苦心の見ゆる一點は、賞讃を惜しまざる所にして、斯かることの重なるに伴れ、一種の階級のみを、皇室の藩屏と云ふが如き陋風も消滅し、國民皆文字通りに皇上の赤子たるを得べく、現に知人中には、確かに二人ほどは感泣涓涙したるを見受たりとの事に御坐候。聞く所によれば、侯の友人中には、新聞記者を招待して、一場の燕席を開き、以て其平生の憂勤に酬ゆべしとの説を以て、侯に勧誘したる人有之候へども、侯は之を聽かず、終に破格の恩典を與へられんことを奏請するに至りしものよし、若し果して然らんには、如何にも大宰相の風ありと可申候。蓋し新聞記者等、固と皆皇上の忠臣にして、其志、時鳥候蟲と同じく、太平を鳴らさんと欲するに過ぎず、時として筆端欄干に及ぶもの、また皆朱雲の志と異ならず。其君を堯舜に致さんとするの心事に至りては、文武百僚と、軒輊無之譯に候へば、斯かる機會に方りて、斯かる恩典を與へられ候は、皇上海岳の識量

にして、明治の昭代が、文治武烈、千古に度越する所以も此に外ならず候。而して海宇の蒼生をして、此皇上の識量を仰がしむるは宰相の責任に候へば也。(明治四十年四月十六日)

一向に容赦の要らぬ事也

敬啓、工夫暴動熱は幌内鑛山に於て、其犠牲を發見し、言語道斷の騷動を起し候。世間或は之を以てストライキなどと申候へ共、決してストライキにはあらず。純然たる暴動に御坐候。ストライキは工夫に要求あり、此要求を達せんが爲めに同盟して、其就業を廢するに過ぎず。其威力を示さんがため、時としてデモンストレーションを行ふことあるも、また整々肅肅、他人に危害を及ぼさざるを期し候。ストライキにして此に止れば、何人も之を制壓する能はず候へども、足尾事件と云ひ、幌内事件と云ひ、要

求の形式も整はず、罷業もなく、示威運動もなく、突然役員を襲撃し、家屋に放火し、殺威を逞うするに至りては假令其要求にして極めて正當ならしむるも、亂民を以て之を待ち、斷然たる處分を施し、些の寛假する所あるべからずと存候。兎角、我國には活剝生吞の人道論者ありて、汲々として人氣取を勉め、かゝる場合に法令を嚴行するを以て、無慈悲なるが如く論ずるものありと雖も、一向に容赦の要らぬ事に御坐候。國家の權力、一たび發動せば、上に天なく、下に地なく、中に人なし、唯だ其行くべき處に行くの外無之候。是れ國家は工夫を愛せざるにあらずと雖も、國家の安全、多數の良民を愛するがために不外候。過日佛國巴里にて、電氣工夫ストライキを起したる節に、首相クレマンソウ氏は、逸早く騎兵歩兵を街衢に併列し、威力を以て暴動を豫防致候。其節社會黨の首領ジョウレー氏が議院にて出兵の當否を論評致したるに答へて、クレマンソウ氏は、秩序安寧の

破らるゝは國家の存在を威迫せらるゝなり、國家の存在を威迫せられたるに方り、國家の首相が傍觀するを容すべきかと反問したるがため、ジョウレ一氏も沈黙致候。クレマンソウ氏は或る意味に於て赤熱の自由家にして、社會政策の信者に候へども、其國家を擔當するや則ち此の如し。小生は我行政官が亂民を鎮壓して、秩序を維持するに於て、敢て或は依々逡巡することなからんことを切望致候。(明治四十年五月一日)

行藏地を易へなば吾猶人の如し

敬啓、昨日は日曜に當り候まゝ、暴風を冒して五六の親朋と小集を相催し候。酒後茶前、諸豪の警句名言、口を突て出で候時、一人の説に、我國にては先づ最も眞面目に其の職務に忠實に、且つ材力あるものは陸海軍人なるべし。文官の如きは、放慢にして輕薄、到底、軍人に及ぶべくもあらず。

政黨員の如き、概してまた文官に及ばず。勿論軍人には追隨すべくもあらず。新聞記者に至りては最も劣るとの事に御坐候。右の如き説は、從來往々政黨員及び新聞記者中の通人らしき人々より承知したる所なれば、今更ら他の社會の人より聞くも、怪しむべきには無之候へども、是ほど間違つたる議論は無之候。第一、武官が文官に優れりと云ふが已に間違に候。是れ民間に居る人は、文官の爲すべき事務に就ては、一通りの概念を有し、其の巧拙のほど目に入り易きに反して、武官の事業は専門にして、素人に譯り易からざるがため、何となく、有爲らしく見ゆる譯に御坐候。政黨員新聞記者が各文官に及ばすと云ふも、之と同じく、民間の士人が、此二種の人々とは相接近して、其事業をも解し、其短長をも知り、官吏には割合に縁遠きがため、稍々専門家を見るが如き心地するが爲に外ならず。所謂豫言者も故郷には尊まれざる譯に御坐候。若し夫れ文武官の調査知識と政

黨員新聞記者の調査知識とに、精粗の別ありとせば、是れ文武官は、其調査知識のために衣食生存し、其嗜好と、生活と、職業とが一致するに反して、政黨員新聞記者は別に職業あり、別に知識あり、唯だ愛國若くは功業の念より、調査立論するがために外ならず。文武官が政務上の知識を有するは、恰も専門畫家が畫に巧みなるが如く、當然の事に致して怪しむに足らず候。唯だ政黨員新聞記者は、職業以外、生活以外、専門以外にて、何等の調査機關もなく、何等の報酬もなくして、物數寄にも經綸、政策を立つること、其れ自身已に嘆賞すべき事に候。況んや其の専門ならざる、職業ならざる批評經綸が、往々にして専門家をも凌ぐに於てをや。今日の文武官をして、假に其の職業を去らしめば、果して一身の生活を外にして、治國濟民の志を懷きて公共のために大奔走すること、政黨員新聞記者の如くなるを得るもの果して幾人があるべきや。小生は頗る之を疑ふものに御

坐候。然れば今日民間の論客は、其氣魄材幹、概して文武官に優ると申すも、必しも過言にあらずと存じ候。右は昨日小集にて小生の申したる處にて、友人もまた悉く之に同意致し、世間前條の議論を唱ふる人不少を思うて、茲に御報導申上候。(明治四十年五月六日)

ストライキの横流此に至りて極まれり

敬啓、過日來、佛國よりの電音は、數ば官吏がストライキを企てんとするを報道し來りしが、近著の新聞によれば、此間の消息、略ぼ相分り、人をしてストライキ横流の旺なる此に至りて極まるの嘆を生せしめ候。元來現實政治に社會主義の行はるゝこと、佛國の如きは少なく、官吏も自然に一種の利害同盟を作ること久しかりしが、近日に至りては、場合によりてストライキを企て、以て其の利益を守らんとするの傾向あるを以て、クレ

マンソウ内閣に至り、一種の法律を作り、學校教員より海軍豫備士官に至るまで、凡て國家の俸給によりて衣食する者は、他の労働者と同じく、利害同盟を作るの權利ありとなし、苟も其利益の侵害せられたる場合には、共同の權利によりて其利益を保護するを得べきも、官吏はストライキの權なしと規定せんと致し候。是れ即ち官吏が憤然としてストライキを起さんとするに至りし原因に候へども、クレマンソウ翁も、流石に豪傑の風あり、果敢大膽に其所信を斷行するの勇氣あれば、今頃は多分官吏の方にて屈服したるならんと被存候。抑も千八百年の大革命は、大地震の如く、佛國の地盤を混蕩顛覆致候へども、其結果は年と共に滅却して、唯一のナポレオン一世を残し、而してナポレオンの事業の残りしものは、唯一の行政組織あるのみなれば、ボッドレーの如きは、佛國革命の遺産は、行政組織あるのみと申し居る位にて、佛國の今日あるは、其行政の力に御坐候。然るに

時代の疾病は、此中心をすら襲撃するに至りては、實に曠世の一大變化にして、深く注目すべき顯象に御坐候。我國の如きも、從來、官吏は體面、名譽、服務紀律等にて節制し來りしも、大隈、板垣の政黨内閣起りし以來官吏は相徒黨して、一種の同盟を生じたる傾向あるに加へて、國家營業の新風潮は、容赦なく我政府を驅りて、鐵道、鹽、煙草、樟腦の間屋たらしむるに至り、一種の労働者を政府部内に引入れたれば、今後、此等の徒に對して、少からぬ困難を感じるに至らんこと、昭々として見るべく、以太利が爲したるが如く、鐵道工夫を軍律に充つるの時節なしとも限られず候。兎に角、佛國の殷鑑に照らして、今より官吏取締の方法を講ずるは、先見ある政治家の職責と存候。(明治四十年五月十四日)

興味ある日土修交條約

敬啓、本日サアページ俱樂部にての風説によれば、日本政府より、土耳其政府に對して、修交條約締結の申込を爲したれども、日本が土耳其に對して治外法權を獲得せんとするの一點は、頗る土耳其政府を苦しめ候へば、此事或は六かしからんとの事に御坐候。小生は果して我政府が、自ら進みて修交條約を締結せんことを申し出でたるや否やを知らず候へども、當然申し出づべき筈にて、また若し申し出でたりとせば、其基礎は治外法權を我に保留するにあるべきは、是れ亦當然の事と存じ候。卑見を以て推測するに、或は土耳其の方より申し出でたるにはあらずやと思はる、節も有之候。土耳其皇帝は、例の軍艦ノマントン號發遣の頃より、深く日本の國勢に就いて興味を有し候ひしが、此興味は日露戰爭によりて、更に一段を加へたるが如くなれども、土耳其に對する露國の積威、猶ほ輕んずべからざるものあるがためにや、此の興味と、熱心とを、實際に示すの機會なくし

て今日に至り申候。然る處昨年の秋頃より誰言ふとなく、日本は佛教の恃むに足らざるを嘆じ、基督教の失敗に懲り、新にマホメット教を以て國教とせんとすとの風説を放つものありて、深く土耳其の君臣に信せられしが、此頃より土耳其は自から日本と接近せんとするの熱心を加へ來りたるが如くに候。これ小生が、土耳其より進み來りしにあらずやと申す所以に御坐候へども、是は一場の想像のみ。其中、外交當局に面會致し候は、事情分明なるべく候。偕て右の如く、日土の修交談判ありとせば、治外法權の保留は、果して世評の如く六かしかるべきやと申すに、小生は必ずしも六かしかるべしとも信じ不申候。是れ日本が自から土耳其より優等なりと云ふが如き、虛榮心より主張するにあらず、土耳其の法律行政が、日本人の生命財産の安全を託するに足るほどに進歩し居らざるがために外ならず候へば、土耳其にして日本と修交するの心さへあらんには、他の歐洲諸國に

許したるが如く、之を日本に許すを惜しむものにあらざるべしと存せられ候。但し土耳其皇帝も、今は獨逸皇帝と云ふ親友を有し居られ候へば、獨逸大使の進言如何によりては、何等の結末を來すべきかは、保證の限りに無之候。世間或は、獨逸皇帝は、日本が土耳其と接近するに異議なきも、日本の艦隊がエイジアン海に入るは、バルカン問題に關する英國の發言を強むるの恐れあるを以て、之を嫌惡すと申すものなきにあらざるも、獨逸は我國に對して、好意を有する旨、數ば、其責任者より聞く所なれば、此宣言にして、誠意より出づるものなりとせば、かゝる場合に於て之を表示するの利なるは、賢知なる獨逸外交家の解する所なるべければ、小生は獨逸が、必らず日土の修交を妨害するものにあらざるを信じたしと存じ候。何れにせよ、日土修交の成否は、又一方に於ては、獨逸の對日政策の試金石と申すも差支無之候へば、外交の研究者に取つては、頗る興味ある問題

に御坐候。(明治四十年五月十五日)

人類のゴールは故郷に在り

敬啓、小生は一昨々夜、松本代議士と相伴うて越後高田に入り、同地の高等小學校にて開かれたる上越教育會、中頸城郡教育會聯合會に臨み、一場の演説を相試み候。集會は一千餘名の男女より成り、同地にては未曾有の盛會の由に候。松本博士、小生に先ちて演説あり。日本近時の成功を以て、教育の功に歸し、この成功を維持せんが爲めには、更に前進の外なしとなし、而して國民をして進一進せしめんには、植民政策を取るの外なければ、教育家は植民教育に勉めざるべからずとの主意を敷演せられ、前後一時間餘に亙りて左説右論せられ、確に一大演説に有之候。小生は其の後を受けて、一人の運命は一人の氣質中にあるが如く、一國の運命は國

民の氣質中にあるれば、國民教育の第一義は、國民氣質の鑄陶にありとの趣意にて、方今の人心、雍容、豊大の調を缺き、衰世凋殘の餘韻を帯ぶるを以て、教育家が興國の隆盛に伴ふ大氣魄を開拓せざるべからざるを論じ、更に時勢に對する國民の見解は、其氣質に與つて力あるものなれば、崇古卑今の俗見を捨てざるべからざるを説いて、方今の論客が、動もすれば腐敗墮落を口にして、其實を究めざるを難じ、時勢人文は日夜に進みつゝあれば、教育家は、天を樂しみ、望を懷きて、人を教へざるべからざるを説き申候。右の演説は何れ讀賣新聞にて御目にかけて可申候。さて小生の演説終ると共に、殿は之を慶應義塾の林毅陸君に一任して、小生等二人は、人力車を役して春日山下に英雄の陣迹を憑吊しつゝ、直江津に至り、同地の河合直次、石塚豊作の兩君に導かれて海岸を散策し、郷津灣築港の意見など語合ひ候。石塚一家は小生の舊友に有之、河合君は同地進歩黨の領袖に

て、其人、公義に富みて、地方民政に盡くす所不少と聞及び候。斯くて午後四時より尋常小學校にて開かれし實業青年會に臨みて、一場の説話を試み、直にまた人力車を驅ること二里にして、高田の高陽館に入りて、教育會有志懇親會に臨み、其夜直に汽車に投じて歸京致し、茲にまた讀者諸君と相見ゆることと相成り申候。此行往復とも、大部分は汽車中にて睡眠し、約束、迎接、丸で飛脚の如くに多忙を極め候へども、故郷の青山白水は、常に我を作興して心神を慰藉致候を見れば、人類のゴールは、矢張り故郷に有之ものによ、不思議に被存候。(明治四十年五月二十八日)

二個の異様なる伯林電報

敬啓、本日の新聞を展讀致し候處、二個の異様なる伯林電報あるを見受け候。即ち伯林駐在佛國大使が、日佛協約の全文を獨逸政府に内示したり

との報道と、佛國政府が日本に駐在する安南の僭王處分法に就き、日本政府に照會する所ありたりとの報道に御坐候。小生は我讀者が如才なく、眉に唾つけて此報道を受取られたるならんと想像致し候。日佛協約は獨逸に對して何等の異圖なきものなれば、前以て之を示すも一向に差支なきことなれども、さりとして目今左様の運びになり居るとも不被思候。是は日佛協約に關して、多少神經性を現はし來りたる伯林の新聞紙に對する鎮靜劑にして、之によりて獨逸が、世界的合奏會に陳列せられたるものにあらざるを示さんとするに外ならざるべきか。第二の安南僭王云々に至りては、根も葉もなき事に御坐候。安南僭王が日本に伏在するなどは、曾て風説にだもなかりしことに御坐候。然らば其の引渡しが問題となるべき理由も無之候。若し此等の事より佛國の新聞紙が、日本を以て安南人逋逃の淵藪ならんと邪推致し候は、それにて此電報の目的は達せらるゝならんと被存

候。序ながら外國電報に就て一言可致候。現今世界に於て最も手廣く營業致居候電報通信は、ロイテル電報にて、右は初め獨逸カッセル出のロイテルなる一少年が、伯林とミュンヘンとの間に株式の狀態を急報して利を得んとて、電信と傳書鳩とを併用したるに基きたるものにて、其根原が獨逸なるに係らず、今は純然たる世界的の事業となり、ロンドンに於て其中心を据ゑ居り候。右の外、歐洲の出來事を快報するには、ラファン通信あり、巴里にはアヴァス通信あり、羅馬にはステファン通信あり、伯林にはウヲルコ通信あり、米國には聯合通信あり。それにて相應の信用を有し候處、獨逸政府は、別に人を役して獨逸通信を起し候。故に歐洲の或戲畫師は、獨逸大宰相ピッコウ侯が、總身より汗を出しつゝ、電信文を起草して、世界の四隅に發するの圖を畫きたること有之候。是にて歐洲通信の讀方、御會得被下たることと承知致候。(明治四十年六月四日)

悉く是れ史眼なき歴史家也

敬啓、昨夜、友人の小宴せうえんに列して家に歸れば、細雨蕭々さいうせうせう、窓外點滴そうぐわいてんてきの音あり、夜趣頗る愛すべきを覺え、沈吟ちんぎんすること多時、世事せじ、交朋かうほう、一時に心頭に上り、虚想紛來きよきょうふんらい、禁すべからず。乃ち筆を取りて近時開刊かいかんの歴史數種を評して、以て虚想を拂はんとして數百行を草し、試みに之を諷誦ふうじゆうするに全篇難詰ぜんぺんなんきつの文字のみにて、一字の讚美さんびあるなし。政治上に於ては、辯難べんなん攻撃こうげきは一向に躊躇不致候ちゆうぢふちへども、文學上の著作ちやくさくに就いて此の如くなるは、如何にも著者に對して氣の毒ゆるゑ、之を筐底きやうていに藏す事に致し候。近時我國にても、史學が段々研究けんきゆうせらるゝは可賀事かがきことながら、史學も猶他の文學及び科學の如く、天分の才氣を要するものにして、庸人ようじんの得て學ぶ所まなぶところにあらざるを察せず、唯だ汲々きふくとして事實を竝羅へいらすれば、此中に史學ありと思ふも

の不少は、慨なげはしき次第に御坐候。史に三才を要すとは漢土かんどの史家しかの申したることながら、小生は此外、魚類ぎょるいに五感ごかん以外の魚感ぎよかんとも申すべきものあるが如く、犬猫いぬねこに夜視やしの力あるが如く、月來香草げつらいかうさうが夜來月やらいつきを見て香を發するが如く、新聞記者が一種の新聞記者感しんぶんきしやくあかんあるが如く、歴史は史眼しがんとも可申一種特異とくいの才能さいのうを要するものと信じ候。此史眼しがんたるや歴史れきしのインサイトinsightや、哲學的てつがくてきのフチャアサイトフチャアサイトや、政治家の識量しきりやうなどの合體がうたいしたる如きものにて、此眼しがんあれば凡眼はんがんには、恰も沙漠さばくの如く何の意味いみもなき史實しじつも、無限むげんの意義いぎを生じ候。然るに近時の歴史なるもの、多く此史眼しがんなき者によりて述作じゆつさくせらるゝがため、古文書こもんじよの陳列ちんれつ、若くは史料しりょうに過ぎず、適當てきとうに歴史と命ずべきもの少きは、遺憾いかん千萬せんまんに御坐候。元來史料げんらいしりょうを配列はいれつして歴史と稱するは、猶客ゆうかくを招きながら、之を座敷ざしきに請しやうじて精選せいせんせる料理りやうりを饗きやうすることせず、直たぢちに之を臺所たいどころに導きて、大根だいこん、人參じんじん、魚獸ぎんぶつを見物けんぶつせしめ、客若かくわし好まば、

此中より何ものにも取られよと云ふが如し。主人の勞力は爲に減すべく候へども、客に對して無禮の甚しきものと申さざるべからず。近時、歴史家と稱する輩が、此無禮の主人たらんとするが如く、判斷もなく、結構もなく、唯だ史料の如きものを列べ立て、自ら街つて獨逸流なるが如く云ふものあるに至りては、史學を貶して、抄書の業に等しからんとするものにして、憫むべき人々に御坐候。斯く申したる所が逆も此輩を論すこと六かしかるべく、畢竟、大才ある歴史家が一大著作を示して、事實によりて文壇の新風潮を引き起すの外なかるべきかと被思候。(明治四十年六月六日)

曾遊の陳迹を想起致し候

敬啓、昨日汽車中にて三井の一役員に邂逅致し候處、益田孝氏が三井一家の男女、數人と同道して、歐洲觀風の途に上るべしとの風説は、愈々事

實なる由承知致し候。是れ富豪の家事にして、傍人の批評すべき限には無之候へども、小生は深く之を祝賀するものに御坐候。故、如何と云ふに、從來歐米に漫遊するもの、幾百千人に御坐候へども、多くは官吏か貧乏政治家にて、ホテルに滞在するも、財布の輕重に心配すると云ふ様な境遇にて、幾度ホテルに出入するも、燕去雁來、一向に何等の感觸をも止めず、依然として他國人の跋扈に任せ候。是れ甚だ殘念ながら黄金萬能の今日に於ては、如何ともすべからざる次第に候。然るに今は三井氏の男女相携へて、旅程に上ると云ふに至りては、聊か從來の單調を破るものにして、歐米に在留する我國人の爲に、氣を吐くに足るべしと存じ候。殊に女性が其中にあるなど、尤も妙にて、三菱氏に比して進取的なる三井氏の性格を示し、面白く被感候。三井氏累代の厚業を以て、單に銀行翁に止まらず、物産會社を經營して、内外貿易の任に當り、大西洋、印度洋の要地、多く其

支店を開設して、商業の樞機を握り、殊に惜氣もなく新進の人材を使用し、進取するの状目ざましく、我海外貿易の開展に就いては同會社與りて、絶大の力ありと申すも過言にあらずと被存候。小生も曾て支那沿岸の地に於て、同氏支店のホスピタリチーを享受し、芭蕉葉より注ぐ点滴の響を聞きて、マンゴスチンの美菓を食したることも有之、益田氏等の外遊を耳にして、曾遊の陳迹を想起致し候。五六年の往事、已に茫々として夢の如し。知らず明年此身また何の地にあるべきか。感慨不可禁候。(明治四十年六月十日)

當今の學生意氣振はざるに非ず

敬啓、世間、一概に今の學生を評して、墮落せりとか、文弱となれりとか申す者有之候へども、小生は之を信せず。昨今試験間際となりて、學窓を離れたる後の身の振方に就きて、小生に相談に来るもの、皆堅實にして信

すべく、多くは雄心落落、海外に運命を賭せんとするものにして、中には蒙古に入りて穹廬の中に牛酪を嘗めんとするものあり、アルゼンチーン、グアテマラの地に封侯を求めんとするものもあり。北亞米利加に入りてミリアネアたらんと志ざすものあり。或は半生をマレー島、ジャバア群島に費さんと欲するものあり。中には身尙ほ中學にありて、スベーン語を兼修し、南米に新故郷を求めんとするものも有之候。昨今の弊居は、丸で少年植民黨のクラブの様に御坐候。不知、世間學生を罵るもの此等の潮流を知るや否や。小生權力の地に立たず候へば、彼等のために助力を與ふるの方法に乏しきは、彼等もまた承知の上にて、唯だ助言と奨勵とを得んとし、て來るものに不外候へば、其志は一層優しく被思候。少年無垢の心中より案出するの大望は、殆どデヴァインにして、合掌禮拜の價あり。小生は彼等と玄關にて別るゝ毎に、胸中無限の感慨を生じ候。方今天下泰平、國

威四方に光被し、民力蔚然として外に溢れんとし、南蠻西戎の地、皆我少年の經路するに一任するの風あり。縉紳先生、若しよく此等の植民黨を助けて、其志を遂げしめなば、此等の中には英國のために一大領土を阿弗利加に建てしセシル、ローズもあるべく、獨逸のために阿弗利加を經路したるドクトル、ペーテルもあるべく、佛國のためにマダガスカルを取りしがリアシンも可有之候。帝國主義は近來の流行語に候へども、方今に於て帝國主義とは植民政策に外ならず、而して植民政策も詮じ來れば、『醉臥三沙場君勿笑、古來征戰幾人還』といふ調子にて、葡萄の美酒を傾けて蠻烟瘴雨の中に突入する個人植民家をして、其志を遂げしむるの機會を作りやるに不外候。此志を遂げしむるの途をも開かず、口舌の上にて帝國主義など唱へ候處が、空言、寸益も無之候。或は是等少年の大望を以て、河漢の望なりとするものなきにあらざるべしと雖も、希望ある處、方法あり、大

事が夢の如くに成るは、方今天下の大勢に候へば、世間、學生を罵る人々が、彼等の爲に、新運命を開拓するの道を講じやらんことを切望致候。

(明治四十年六月十一日)

國家の信用を代價とするを許さず

敬啓、喬木、風に嫉まると申すことあり。近來我國聲の大に揚るに伴うて、讒誣中傷が雨霰の如く我帝國に落ち來り候は、是非もなき事ながら、我國民を以て好戰國民なりとし、日夜爪牙を磨きて他國侵襲の機會を窺ふものなりと云ふ風説が、多少の信用を世間に有するは、頗る心外に御坐候。然る處右の愚論に對し、明快、周到の大論陣を張りて、其根據より之を覆したる者を、東京在留米國宣教師中より出したるは、近頃満足の次第に御坐候。即ち過日來日本を以て依然たる黃禍國なりとし、國民は擧つて侵略

の異圖ありとなし、大隈伯の如き頭腦平靜の政治家少なしと云ふ者あるに對し、ドクトル・グリーンは、北清デーリーニウスに一大論文を寄送して、之を駁撃致し候が、要するに日本の陸海軍は、其隣國に存在する議論の結果として、必然のものなれば、此陸海軍を有すると云ふことは、決して好戰國民と云ふべからずと云ふに有之候。是より尊敬すべき宣教師は、其の殆ど開國以來在留視察したる經驗によりて、日本國民は所謂ミタリズムの信者にあらざることを辯折し、軍隊の外、日本が崇高なる目的を有することを説明致し候が、これは茲に繰り返すまでもなしと信じ候。何となれば是れ我々の平生、爲し、論じ、望む所を表明したるものに外ならず候へば也。ドクトル・グリーンは最も古く日本に在留せる宣教師の一人にして、且つ最も善く日本を領解したる見物人の一人にて、其宗教家として老實温厚勤勉の好宣教師たるは申すまでもなく、條約改正論の起りし以來、其の

日本の眞情、眞價を外國に紹介し、我帝國の爲に貢獻すること少々にあらざるは、識者の齊しく認識する所に候處、今また其の日本の眞友たる一新事例を加へたるは、小生の深く感謝する所に御坐候。右に就いても我政治家等が政府を批評するに方りて、亂雜にして尺度なき言語文字を用ふるを慎まんことを希望するの頗る緊要なるを感じ候。何となれば外國人が我國狀を批評するの材料は、概して政府反對黨の言論に取るものに外ならず候へば也。小生は大隈伯等が殊に深く此點に注意するを必要と存じ候。一個の政治家が其の聲名を美文社會に賣らんとするは可なり。唯だ國家の信用を其の代價とするに至りては、愛國心ある者の爲すに忍びざる所なるべしと信じ候。(明治四十年五月十七日)

朝吹英二氏の石田三成觀

敬啓、朝吹英二氏、平生石田三成の人となりを重ね、罵詈譏諷、堆を爲したる舊派の歴史中より、三成の眞骨頭を拂拭して一家の論と爲し候處、今回同氏の友人等其の墳墓を發見開掘して、遺骨を得、醫學博士に見せ候處、英雄の風采、想像すべきもの有之候由。抑も歴史上に於ても、現代に於ても、武將を尊敬して、文臣を輕ずるは、一般人心の弱點にして、三成は不幸にして文臣出身なるがため、當時に於ても、後世に於ても、不利の地に立ち候。且つ女は美惡となく、宮に入れば妬まると申す如く、功勳年處によらざる破格の出身は、文武となく一世の嫉妬を受くべき運命を有し候に、不幸にして三成は微賤より躍進したるものにして、自然の勢、武將中の新派と相黨せざるべからざるの地に立ちて、宿將老臣の攻撃を一身に集むるに至り候。以上二個の理由によりて、三成は多くの他の歴史上の人物と同じく、其の受くべき運命を享受して、現在、歴史、共に誣謗の爲め

に葬り去られ候。乍併、具眼の士は常に聲譽好評を捨て、讒謗攻撃の中より人物の眞價を發見するを務む。小生は幸に朝吹氏と、其の意見を同うするを喜ぶ者に御坐候。三成の人物如何に誤解せられ候も、聲望を缺きし新進を以て、落日西春の豊臣氏を提げ、旭日朝暉の勢ありて天下の力を合したる徳川氏に對抗し、遙に直江兼繼と相策應して、家康を東北に向はしめ、其の虚に乗じて事を擧ぐなど、布局あり、畫策あり、而して其の中、兵五六千人、皆殊死して退かざりしが如きは、確に其の人物たるを證明致し候。若し秀吉の天下を魏に比し、之れに代りし徳川氏を以て晉に比すれば、三成の地位は諸葛誕に相當り候へども、誕は司馬文王の征伐に遇うて脆くも夷平せられ候。然るに三成は家康と乾坤一擲の大戦を試み、歴史家をして小早川秀秋にして反覆せずんば、勝敗の決孰れにあるかを疑はしめたる位に候。其の事成らずして刑死せしものは戦の罪にあらず、天時、また人力

の如何ともすべからざる所に御坐候。三成が戮せられんとするに方り、加餐愛惜して其の病を癒さんとしたる一事は、佛國のラッジエント・ヒロン候が、刑場に引出されんとして、刑吏の督促を受けたる時、泰然として、刑吏よ、我に寸分時の猶豫を與へ、我をして此牡蠣を食ひ了らしめよと呼び、徐ろに一餐を終りたると同じく、英雄の自愛、東西異曲にして同工、眞に面白く被感候。要するに忠奸派の歴史人物論の當にならざるは、今日の人物論の當にならぬと同じく、之を拂拭して、眞價を知るには一隻眼を要し候。朝吹氏、書畫骨董を愛翫すると聞く、然らば則ち人物の鑑識もまた骨董鑑識の法より得來りしものか。何は兎もあれ、小生は、朝奔夕走の實業家中に、此間靜觀あるを歡迎致候。(明治四十年五月二十四日)

(以上讀賣新聞所載)

時鳥候蟲錄

膠州灣占領問題

獨逸軍艦が膠州灣を占領したるは十一月十三日なり。爾來三週日、評議に評議を重ね、相談に相談を重ねながら、我政府が未だ確然たる外交手段を取らざるものは何ぞ。抑も又民間の政黨、新聞紙が徒に囂々として危機を報ずるも、遂に一定の主義を以て當局に要請するものなきは何ぞ。豈獨逸の爲す所を黙認せんと欲する乎。それ或は抗議を欲して而して形勢に惑ふ所ある乎。我輩は其遷延模稜の間に千古の大機を過たんことを恐るゝ也。蓋し獨逸公使が提議する所は、殺害せられたる宣教師のために報復を求め、皇帝の敕語を得て、教會堂を保護し、以て後來兇暴の繼發を戒しめん

と欲するにあり。其の言順ならざるにあらず。其の要求正しからざるにあらず。而かも先づ交渉する所なくして、而して縦に他國に侵入し、其の軍隊を追ひ、其の士官を捕へ、其の土地を占領するに至りては、何等の不法、何等の無禮ぞ。是れ決して十九世紀人道の名に於て許すべからざるの非行也。是をして、東洋未開の國民、若くは阿フリカの酋長によりて爲さしめよ。猶ほ許すべからざるの非行也。況や獨逸は基督教國にして、而して其の求むる所は、基督教の宣教師の爲にすと云ふに於てをや。基督教國の義人之を聞かば、其の脈管は正に義憤の熱血を以て充さるゝなり。是れ決して我政府が黙過すべき事にあらざる也。千八百八十六年佛國は支那に事ありて臺灣を封鎖しつゝ、交戦國の地位に立つを肯せず、只だ支那をして談判を承諾せしむるが爲に、一時の封鎖を行ふものなりと號し、出入の船舶に不便を與へ、而して自家の軍艦をして香港より石炭を積ましめんと

す。是れ所謂平和の封鎖にして、國際の交渉に於て前例なきに非ず。然も時の英國宰相グラングェル卿は之を拒絶し、明白に開戦の状態にある交戦國と見做すと通告したりき。今や獨逸は初に支那政府に交渉する所なく、縦に其の海兵を上陸せしめ、支那皇帝の命によりて膠州灣を防禦する軍隊を放逐して、其の士官を擄にす。是れ實に無法の極也。而て我國家に對しては占領の通告をも爲さず、我商人より石炭を買ひ、糧食を買ふの自由を取る。是れ實に我國家の能く爲すなきを欺くものにあらずして何ぞ。我政府は先づ第一に獨逸政府に向つて明かに交戦國と見做すの通告を發し、其の我土地より便宜を得るを拒絶せざる可らざる也。假に獨逸公使の提議をして、眞實、宣教師の爲に求むる所あるに過ぎざらしむるも、決して黙過すべからざるもの也。況や其の包藏する所の禍心に至りては、不測のものあるに於てをや。蓋し獨逸帝國の歐洲中原に勃興するや、其の事甚だ逆にし

て、其の志ざす所、力征を以て天下を經營せんと欲するに外ならず。武力を以て歐洲の霸權を制するもの此に二十年、而かも人々千年の壽なく、國に常勝の勢なく、今や露佛同盟の新勢力は漸やく四方より逼迫し來りぬ。獨逸は如何にしてか露國の銳鋒を轉じて、獨逸の外に向はしめざる可からず。加ふるに少帝驕慢にして實義なく、皇室の特權を濫用して、軍隊を其の爪牙たらしめんとし、著しく國人の不平不満を招く。彼は如何にしてか武功偉略によりて、國民の耳目を眩惑せしめざる可らず。此に於てか獨逸近時の政略は、力を東洋に用ひ、露國を誘うて此に至らしめ、以て歐洲を忘れしめ、國民を誘うて東方に注目して、以て内政を忘れしめんとするの一事に傾注す。日本帝國が遼東を取るも、取らざるも、彼に於て何かあらん。然かも彼が力を露國に貸して、遼東還附を迫りしものは何ぞ。唯だ露國を誘うて東方に心を用ひしめんと欲したるのみ。南阿フリカのツランスバ

ール共和國が、英國の冒險者と争うて敗るゝも、勝つも、獨逸に於て何かあらん。然かも彼が共和國の大統領に祝電を發して、英國に反抗せしめんとしたるものは何ぞ。之によりて以て國人の心を外に轉せしめんと欲したるに過ぎざる也。我輩は十月の『世界の日本』に於て、支那論と題し、往を推して來に及ぼし、獨逸が支那を犠牲として、露佛の二國を東方に誘出せんとするの時遠からざるを論じて曰く、

『且つそれ支那は東洋に偏在する小國にあらずして、世界の大力が汇集する一大國にして、汇集せる勢力に對しては、支那政府の發言なるものは織芥の力すらもなきものなるを忘るべからず。故に支那に對する外交は、即ち北京に汇集する列國勢力との外交に外ならず。此の處に於て列國の信任尊重を得んか、支那政府は、我が制令を俟たずして我に聽かん。列國の信任尊重を得ざらんか、如何なる政策を用ふるも支那政府は我に

聴かざるべし。此時に方りて汲々として支那救済の説を唱へ翰林の老儒先生を驚かすも、外交の上にて於てそれ將た幾何の利益あらんや。故に我外務大臣にして眞に清國政略を有せんとせば、先づ歐洲政略を有せざる可らず。而して不幸、我輩は未だ我外務大臣が歐洲政略を有するを見ざる也。抑も獨逸、奧太利、伊太利の三國同盟破れて、歐洲の霸權、露佛同盟に歸しつゝ、あるは近時の形勢にして、獨逸が露佛同盟の間に入りて其排英的傾向を助長せんと欲するは、是れまた中外に顯著なる事實なりとす。露國は固より英國を排するに於て躊躇する者に非ざる也。佛國の如きも其の政治家は表面に於てこそアルサス、ロルレーンの恥辱を口にし、他日必ず之を淨がんと聲言すと雖も、是れ唯だ國人の心を満足せしめんが爲に云ふのみ。其の獨佛の開戦は容易の事にあらざるを知るが故に、衝突の來らざるを望むもの也。然れども佛國の政治は色彩なかるべから

す、何等小説的の誇張なかるべからず、實行すべからざる迄も國權擴張的の標榜なかる可らず。獨逸帝の慧眼、此情偽を知るが故に露國に同意し佛國に同意し、而して其の國人の小説的誇榮心を満足せしむべき排英問題を以て二國を誘引せんとしたるもの也。故に佛國の外交家は表面に於てこそ獨逸を歓迎せざるも、中心、佛國政治家に多少國民に對する推諉の口實を與へたるを慶するものなきにあらざる也。形勢此の如し。獨佛露の新三國同盟は今日に於てこそ薄弱にして恃むに足らずと雖も、一旦英國の利害と相衝突するの場合には、有力なる結合となるものなるを忘る可らず。而して三國と英國が利害相逆ひ、而して獨逸帝が乗じて以て二國との結託を深からしむべき問題は、眼前支那にあるを忘る可らざる也。獨逸歴代の政策は獅子一球を弄して人を忘ると云ふが如く、露國をして其の銳氣を東方に洩し以て歐洲を忘れしむるにあり。獨逸は曾て

露國を教唆して土耳其に事あらしめ、以て其の鋒を轉じたり。曾て露國を教唆して遼東事件に干渉せしめ、以て其の鋒を轉せしめたり。此次に來る所の問題は支那分割の問題に乘じ、露國を誘うて英國を排斥せしめんとするものならざる可らず。是れ殆ど必然の勢必至の理なるが如し。』

果然、獨逸は遂に此に至り我輩をして知言の名を爲さしむ。彼れ豈に東方問題を提起して、支那分割の機會を促し、之によりて露佛同盟の焰火中より、獨逸を脱出せしめんと欲する機略なるなからんや。今回の事、或は大事に至らずして止まん。然れども支那分割論を促成するの手段なるや疑ふべからず。其の包藏する所の禍心已に此の如く、而して我當局の取るべき手段たるや甚だ明白也。唯だ斷じて膠州灣占領に向つて抗議を唱へ、彼をして速に其の占領地を引拂はしめよ。是れ日本政府が、東方平和の爲に盡くすべきの職分なり。而して三國の抗議に従つて、東方平和の爲に我政府

已に獨逸の所置を國際法上の『平和の封鎖』と見做さる以上は、遼東を還附したるによりて得たる權利なり。

然るに聞く所によれば十二月四日の閣議に於て、我外務大臣は獨逸艦隊の膠州灣占領を以て、全く清國に對する要求の保擔として一時的占領を行ひたるものなれば、今日に顯れたる事實のみにては、未だ以て東洋の平和を危害するものと認むるを得ず、從て第三國より利害の關係ありと爲して、此間に交渉を開くは大早計なりとなし、閣臣悉く之に同意し、暫く形勢を觀望するに決したりと云ふ。而して政府黨は之を説明して曰く、我國家、實力寡弱にして、未だ事を大陸に起すに足らざるを以て、暫く時會を窺はんとするのみと、此説明たるや又自から一説也。殊に無事平和を主とするは獨り政府黨のみにあらざるを見れば、確かに政治社會の一部に行はるゝの思想なるべし。我輩と雖も、漫に事を好むものにあらず。然れども國力

の多寡を顧慮して、而して外交上の主張を加減せんか。寡弱我の如きは、未來永劫、國際問題に發言し得るの時なかるべし。若し我に五十萬の陸軍あり、二十萬噸の海軍あるを俟ちて、而して後、發言せんとする乎。我對手國の海陸軍も、また等しく此間に長足の進歩あらん。是れ豈に影を追うて走るの愚に非ずや。若し我國力の十分ならざるを理由として、退嬰せん乎。眼前支那分割の大劇を取るも、また沈黙せざる可らざる乎。我國家七師團の少陸軍と、十萬噸の弱海軍とを有する時に於てすら、國家の體面東洋の平和の爲には、清國と事を構へしにあらずや。今や我陸海軍は、凡てのものを犠牲として擴張せられつゝあり。我經濟社會の利益も、之が爲に放擲せられ、凡ての價金は皆之が爲に消費せらる。我陸海軍は十二師團、二十五萬噸の完成期に至らざるも、昔日の比にあらざるや明か也。此の如き陸海軍を背後に控へながら、懸軍萬里の孤獨の獨逸艦隊をして、傍

若無人の舉動を爲さしめて、傍觀せん乎、我外交機關、我海陸軍なるもの、將た何の爲に存する乎。今年此の如く、明年また此の如くならん。獨逸皇帝は其の議院に公言して曰く、「膠州灣に一隊の獨逸兵を上陸せしめたるは、清國に於て二人の獨逸臣民虐殺されたるに因り、其の賠償を求め併せて、今後同様の慘事再び起るを豫防せんが爲なり。深く議員諸卿に希望するは海軍擴張の議に協賛を與へ、以て獨逸をして其の名譽を海外に維持せしめんことなり、之が爲に朕は、朕が唯だ一人の皇弟を帝國の爲に捧げ與ふることを辭せざりしなり」と。それ半死半生、軍艦らしき軍艦すら有せざる支那に向つて、一個有力の艦隊を派遣し、而して其の皇弟ハインリッヒ親王の生命すら賭せんと云ふに至りては、明かに我日本帝國が、如何なる態度を取らんとするかを慮りての言語ならざる可らず。對手國は、我が十分の抗議を試みんことを推測して此舉動に出づ。而して我冷然として傍

觀せんとす。抑も大人の舉動か、將た痴者の舉動か。我當局にして遂に傍觀に終らんか、歐洲列國の眼中、殆ど日本なからんとす。今後如何なる東洋問題の現出することあるも、日本は永く之に加はる能はざらんとす。是れ僅かに世界の舞臺に上れる日本をして、長く暗黒中に入らしむる也。故に假令今回の事變をして、必しも絶大の事ならざらしむるも、日本は東洋問題に發言を求むるの權あるを示し、日本の同意を得ずんば、東方問題を處置する能はざるものなるを示さんが爲に、抗議を提出せざる可らず、況や其事甚だ大なるをや。我輩は我當局が、速に有力なる抗議を試みんことを望むや切也。

論者或は列國の形勢に惑うて、露獨の間、何等かの默諾あらんことを恐れ、直前の抗議が、不測の禍を招かんことを憂ふ。是また慎重の議論なりと雖も、更に一步を進めて觀察せよ。露國が獨逸の舉動に關しては好意を以

て自由を與ふと云ふが如き協商あるべきも、進みて積極の助力を與ふるが如きは、萬あるべきの理にあらざる也。況や佛獨の間に於てをや。露佛の二國は、決して獨逸の爲に、栗を火中に拾ふの愚を爲すものにあらず。故に我政府にして抗議を試みんか、其對手は一の獨逸あるのみ。是れ決して疑ふに足らずと雖も、若し之を疑ふ者あらんか、抗議はまた此疑似を氷解するの一策也。露國にして眞に獨逸と積極的助力の約あらんか、我抗議に遇は、必ずや其の尾端を洩さん。是より以上は實力の考量によりて決せざる可らず。我當局、若し二國以上の積極的合同あるを見て、彼我の實力相當らすとなすか。抗議を懸けて、長く未決の問題たらしむるもまた一策ならん。對手は眞に獨逸一國に止るを見れば、抗議の窮極する所に任ずるも、また一策ならん。是れ實力の問題なりと雖も、兎に角に抗議を提出するは、現在の體面を保ち、平和を保擔し、將來の東方問題に關して、我地

歩を占むるが爲に、缺くべからざるの處置ならずんばあらざる也。それ松方内閣は、米國が布哇と合併するに對してすら、絶體的抗議を試みたるにあらずや。布哇の我に於ける、數千里外の彈丸黒子の地也。而かも之に對して抗争せし内閣が、現に我一衣帶水の前岸に於て、支那分割の大悲劇の行はれんとするを見て、一の抗議すら提出する能はずと云ふに至りては、また何ぞ前後矛盾の甚しきや。況や前岸の悲劇は他人の事にあらず、他日我日本帝國の運命の否塞を來さんとするものなるに於てをや。松方内閣は、それ或は布哇問題の失敗に懲りて、全然抗議を嫌ひ、美に懲りて膾を吹かんとするものなるなからんか。

思ふに外交の術策、多く我政治家の解する所とならず。彼等が外交を見ること、尋常の政務の如く、成るべく結末のつかんことを欲し、成るべく葛藤の速に落著せんことを欲す。故に國際の問題は、成るべく生ぜざらん

ことを欲し、已に生ずるや成るべく速に之を落著せしめんと欲し、抗議を試むるも、葛藤の種子を永久に残さんことを恐れ、或は抗議の直に徹底せざるや、我却つて其禍を受けんことを恐るゝものあり。然れども外交が尋常の政務と異なる所は、實に此にあり。外交は葛藤の多きを厭はず、葛藤已に生ずるや、我に利あらば速に之を落著せしむるを可とすと雖も、若し我に不利なるか、此問題を永遠不解の問題として、彼我の間に懸らしむるもまた一策也。例せば埃及に於ける英佛の權利は千八百八十二年以來、久しき間争はれたり。事實に於て佛國は全く其權利を失したるに係らず、權利の古證文を握りて、決して沈黙せず、常に之を聲言して以て英國に當り、さりとしてまた全力を盡くして之を争ひ、兵端を開きて是非を決するをも爲さじ。是れ一旦其の權利を放擲すれば、未來永劫、英國を苦しむるの問題なきを憂ふるが故也。且つ古證文を握りて放たざる以上は、歐洲中原の政

局一變するの時に乘じ、其の權利を回復するの機會を得べきを信すれば也。且つ我常に之を聲言すれば、對手國に苦痛と憂慮とを與ふるが故に、一旦我が他の利益を得んと欲するの時、此未決の古證文を彼に與ふるあらば、以て恩を與へて利を得べければ也。略言すれば外交に於ては常に一の葛藤問題を有し、常に未決の問題を有するこそ、威嚇も爲し得べく、恩威をも與へ得べし。我從來の外交は、餘りに小心にして、餘りに清算に過ぎ、餘りに速決に過ぎたるの觀あるを免れず。故に膠州灣事件に關しても、決して其對手の何人たるを問うて抗議を躊躇するを須ひざる也。先づ抗議を試みよ。我對手の實力にして我と相當らんか、斷乎として其窮極する所に一任すべし。若し我當局にして實力相如かずと爲すか、抗議を卓上に懸けて、未決の問題となし、未來永遠、其事を是認せず、他日機會あらば之を争ふの地を爲すべき也。今日彼の爲す所を傍觀せんか、是れ之を是認するに等を望む。

し、今日之を是認せんか、是れ日本の意向如何に頓著せずして東洋問題を處置し得べきを示すもの也。故に我輩は我當局が現在の體面と、利益と、將來の地歩とを占むるが爲に、速に獨逸政府に對して、抗議を試みんことを望む。

我輩が此言を爲すや必しも内閣を苦しめんと欲するにあらず。必しも東洋狂の熱情より云々するにあらず。徒らに對外硬を云々して以て一世の俗論に媚びんとするにあらず。事實に於て對外硬は已に日本國民の間より消え去れり。病熱の去ると同時に、精神氣魄も亦銷沈して、此の絶大の危變に際して、正々堂々主張を抱ける者すらなく、徒に謹慎を云々する者のみ。況や實業家の多くが、國際の平和を希ふの時に方りて、此言を爲す。是れ寧ろ一世の潮流に反抗する者なるべし。然れども我輩は見る所を語り、知る所を告ぐるの責任あり。我輩は自家の責任に辜負する能はざる也。嗚呼

東洋の危變は眼前に迫る。我帝國が世界の舞臺より逐はるゝの問題已に芽ざすの時に方り、一の抗議をすら試むる能はずとせば、知らず我海陸軍なるもの何の爲に存するか。我外交機關なるもの何の爲に存するか。聰慧にして體面を知るの國民は、決して此問題を看過すべからざる也。

(明治三十二年十二月七日)

新戰國策

世に若し簡短なる數語にして、能く一代の人心を腦殺し、驚殺し、激動せしむるものありとせば、絶東問題の一語こそ是なるべし。此語の中には硝煙の臭氣を含むが如く、萬馬の蹄音あるが如く、言ふ者をして眉揚り、聞く者をして耳熱せしむ。此語は惡魔の放ちたる謎語なるかの如く、外交家、愛國家、憂國家、志士、仁人は此問題の解釋に半生の智慧を絞り盡くして

猶足らざるなり。此語のために十萬噸の我海軍は、二十萬噸に増加せられんとし、七師團の陸軍は十三師團となり、戦時には五十萬人の戦士を出さんとし、一億九千萬圓の歳出は、三億萬圓とならんとす。日英同盟も之がために案出せられ、日佛露同盟も之が爲に唱道せられ、黄人同盟も之がために喝破せらる。然れども此問題の解釋せられざるや、毫も前日と異ならず。此問題が東方三帝國の運命を含むや、依然たり。此問題に含まれたる危機は、日一日より迫りつゝあり。此問題が我國民の憂患たること益々甚しからんとす。知らず、此問題は遂に解釋すべからざる鬼語か。抑、また我國家、一人此問題を解釋するの外交的天才なきか。

禍の起るや、起るの日に起るにあらずして、因て來るの原因ありとは、數千百年間、志士論客が用ひ古るしたる陳腐の格言也。然れども方今の外交策や外交論に於て、此套語の微影だも認むる能はざるは、我輩が切に遺憾

とする所也。露西亞が旅順口を取るや、直に之を擊攘すべしと云ひ、佛蘭西が福建に志ありと云ふや、直に厦門占領の紋切形と唱ふ。彼れ來らんと欲するが故に我之に應せんとす。彼れ攻めんと欲するが爲に我之を防がんとす。所謂外交策なるもの此に止まり、政府の政策も民間黨の批評も、皆一時應急の手段にして、遠大の經綸なるもの存するを見ず。一部の事變に應ずる遣り繰り算段のみにして、絶東問題の全局に應用すべき大策あるを見ず。是れ殆ど隻手を以て江河の流を防がんと欲するが如し。争でか絶東問題を解釋するに足らんや。適ま少しく沈著の質あるもの則ち曰く、勉めて八九年の和平を保ち、我陸海軍の設備十分なるを俟ちて、而して我權利と體面とを回復せんと。陸海軍の完備を俟つは可也、八九年の和平を保つと云ふも可也。是れ皆我輩の異論なき所とす。獨り知らず、八九年の後陸海軍の完備するを俟ちて、何事を爲さんと欲するか。若し單に兵力を以

て争はんとせば、我陸海軍の完備すると共に、列國の陸海軍も亦完備するを忘るべからず。殊に露國の如きは已に旅順口を取り、二萬の陸兵を以て之を守り、其西比利亞鐵道と、東洋艦隊の増加とは全速力を以て經營せられ、(露國は三萬二千噸のレールを米國に注文し)而して一方に於ては北歐ノルウェーの境に近きコーラ灣のキカテリナ港に不凍軍港を定め、こゝに經營すること已に一年、之より鐵道を敷設して旅順口まで北歐を横斷せんとしつゝあり。(四月十三日タイムス)、其經營、規模の廣大なる、到底我が及ぶ所にあらず。此大經營にして成らんか(其成るや晚くとも五年の後のみ)、儼然たる一大武國は、一衣帶水の彼方に現出せん。此一大武國を導きて、東方の彈藥庫に放火せんと欲する者は、已に膠州灣頭に立てり。四月二十七日獨逸外務大臣フラン、ピッロー氏は、膠州灣防備のため五百萬マークを議會に要求するや、公言して曰く、『吾人は必らず支那分割の發頭人たらざるべし。』

吾人の爲すべき事は事の起りし時に、空玉を握らざるの一事にあり。汽車の出發する機會は乗客の隨意とはならぬものなれば、汽車を見付次第其の何れにか乗込むこと肝要也。何れにしても吾人が得たる膠州灣は戰略上よりするも、政略上よりするも、東亞の運命に關する將來の事變に關して勢力の分前を保證す」と。東亞の運命に關する將來の事變とは何事ぞ、支那の分割か、日露の開戦か。兎にも角にも、我軍備の完備すると共に、東洋に於ける列國の戰鬪力も、亦同一の歩武を以て増加せんとす。それ今日實力の故に争ふべからずとせば、他日勢力の懸隔も亦今日の如くならん。然らば則ち粒々辛苦なる租税を以て我陸海軍を増加するは、殆ど無意義に終らんとするものにあらざるか。或は外交的手段を取らんとすと云ふか。露佛同盟の成るや略十五年を費し、獨逸伊三國同盟の成るや亦八年を費す。今日其手段を取らずして、漫然外交手段を云ふも、是れまた一個の空言に

終らん。然らば則ち今日確然たる大方針を定め、全力を注ぎて經營するにあらずんば、日本國民は遂に其の運命を支配すべき絶東問題を解釋する能はざらんとす。論じて此に至れば、我輩は喟然として長大嘆息するを禁ずる能はざる也。

鹿を追ふ獵夫山を見ずとは、殆ど我政治家論客を評したるものにあらざるか。彼等は西力の東漸する個々の事實を追うて周章狼狽し、愈々畫策を講じて愈々實際に效なく、西力は漫々として東漸し來る。彼等は此等個々の事實の後へに於て、絶東問題てふ一大山岳の存するを忘却す。此一大問題を解釋せずんば區々の畫策は痴人の夢を説くに等しからんとす。蓋し絶東問題とは此四五年間に生じたる文字にて、世界の歴史に於て未だ曾て聞見せざる所とす。世界の歴史は東方問題の文字を有したれども、東方問題とは土耳其の運命に關する問題、及びバルカン諸州の處分に關したる問題

にして、東方歐洲問題なりき。此問題たるや未だ曾て解釋せられず、今猶ほ紛擾の中にあり。而して歐洲は此未決の問題を放擲して、(若くは半ば放擲して) 絶東問題を提起するに至りしものは何ぞ。歐洲列國は東方問題に關して利害を有すること少からずと雖も、彼等は此問題につきて争ふの甚だ危険なるを知り、此問題を絶東に移したるのみ。譬へば自家の門前にて喧嘩場を備ふるの危険あるを以て、之を郊外に移したるが如し。東方問題は危険なる翫弄物なるを以て、之を歐洲に翫ぶを避けて千山萬水の彼方なる絶東に移したるが如きのみ。請ふ暫らく歴史につきて其來歴を語らん。千八百五十四年英佛の聯合軍、クリミアを攻めて以來、露國が退きて兵を張り力を養ふこと二十四年にして、また土耳其侵略軍あり。英獨の聯合によりて伯林會議を起し、露國はまた其戰捷の獲物を奪はる。之より退きて再び兵を練り力を養ふもの二十年。此間列國互に武備を競うて、寸兵尺鐵

の他國に劣らざらんことを期し、歐洲は殆ど一大陣營となりぬ。而して此陣營たるや、國力の大半を費して成れるもの也。而して一方に於ては、産業の發達は、列國の富榮安樂を來たし、人々皆其生を樂しみ、貿易の發達は、異種異類の民を統一して、別に自から一大共和國を建設したるが如きものあり。政治軍備の上に於て相敵視する國民も、貿易上に於ては一家一國の如くに相親しみぬ。此の如く軍備の擴張は列國をして相攻戰するを憚らしめ、産業貿易の發達は列國をして一家の如くに相和合せしむ。然れども武功を希ふの心、領域擴張を希ふの心、外交權數を喜ぶの心、利益專有を希ふの心は、之がために列國々民の胸中より消え去るものにあらず。列國の帝王統領は如何にもして此種の野心を満足せしめざるべからず。此に於てか列國君主宰相の目は、等しく亞細亞、阿弗利加に注ぎぬ。彼等は其の臣民の獸慾野心を此地に洩らさしめ、以て歐洲の平和を維持せんと欲